
ダメ男依存症候群

霧谷香住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダメ男依存症候群

【Zコード】

Z6480B

【作者名】

霧谷香住

【あらすじ】

奈津美（二十三歳）の彼氏は、旬（十九歳）。だらしない性格の旬は、奈津美の理想とは正反対の『ダメ男』。年上女と年下男のラブストーリー。

1 彼氏

柏原奈津美（二十三歳・〇一）の彼氏は、ダメ男。

「ちょっと……何よこれえ！？」

散らかった部屋を見て、奈津美は叫ぶように叫んだ。

マンションの一室、1Kの少し狭い部屋……そこには「リビング」敷と化していた。

「あ、ナツ～」

部屋の持ち主は、床に寝転がり、ビールの缶を持った手を奈津美に向けて振った。

これが奈津美の彼氏・沖田旬（十九歳・フリーター）。付き合つて一年になる。

「ちょっと旬！ 何でこんなに散らかってるのよ？ 一昨日片付けたばっかでしょ！？」

声をあげながら、奈津美はゴミ袋を片手に、そこいらに散らかったティッシュやラップ麺の容器やビールの空き瓶やらを分別し、片付け始めた。

奈津美がこの部屋にくると、毎回部屋の掃除から始める。それが習慣のようになっていた。

「もーつー。なんでゴミ箱に入れないので…。いつも言つてるでしょ…」

部屋の中は足の踏み場がないほどゴミが散らかっているといつのこと、本来それを納めるはずのゴミ箱は部屋の片隅に追いやられ、ほぼ空だ。

文句を言いながら奈津美は空き缶をゴミ袋に詰めていたんだ。

毎回毎回、同じセリフを言つて、同じようにピリピリして、こんな風に掃除なんてしたくない。……だつたらしなければいいのかもしれないが、そういうわけにもいかない。片付けないと、本当に足の踏み場もなく、寛げるスペースなんてないのだから。

「全くもひつ……よくこんな所に寝てられるわね！」

床にそのまま寝転んでいる旬は、ゴミに埋もれるよつになつてゐる。それで平氣な旬の神経が奈津美にはよく分からなかつた。

「あ、今日のナツ、パンツ黒～」

旬がいつの間にか寝転がる向きを変えて奈津美のすぐ後ろからスカートの中を覗いていた。

「やだつ……ちよつと、もうつーー旬ーー」

奈津美はスカートを押さえて旬から離れた。

「ナツつてばやらしー。あ、そのパンツつて俺のため？ ケラケラと笑いながら旬は奈津美に言つた。

「知らない！」

顔が赤くなつてゐるのを隠すため、奈津美は旬に背中を向けて再

び「//」を拾つ。

「ナツちや～ん」

「さきなり匂が後ろから抱きついてきた。」

「さやつ……!? 何、匂!」

奈津美は驚いて声をあげた。

「しょ~」

甘えた声で、可愛く匂は言つた。

もちろん、匂が言つてこないことは、その言こととは正反対の、男と女の淫らな行為のことだ。

「えつ……」

その「」を分かつてこむため、奈津美は口惑つた。

「さ……今日は会つだけでしょつ! 明日、会社だつてあるんだし
……」

次の日が休日の時は、そのまま泊まつていいくことができるので許せるが、今日は平日。そういうわけにはいかない。それに今日来たのだって、毎間に匂から

『今日会いたい。会えない?』

と、メールがきて、少し悩んだ結果、

『ちよつとだけなら……会うだけね?』

という約束でだ。そういうつもりは全くない。

「匂つ……放して。今、掃除してるんだから」耳元に匂の少し酒気の帯びた熱い吐息を受け、必死に流されまいと、匂の腕を解こうとする。

「ナツのパンツ見たら発情しちつた」

匂はそう言って更に体をくっつけてきた。

「一回だけ……」

「ダメだつてば……あつ

首筋に口付けられ、手が胸の膨らみをしっかりと掴み、奈津美は意識に反して甘い吐息を漏らしてしまった。

「ナツ……」

男らしく囁かれ、次の瞬間には匂の唇に奈津美の唇が塞がれてしまつた。

それからは、主導権を匂に握られ、奈津美はただそれに従つてしまつた。

やつてしまつた……

行為の後、ベッドの隣で奈津美を抱き締めるよつとして寝息をたてている匂を見て、奈津美はため息に似た吐息を漏らした。

……結局、流されるままに一回戻もってしまった。そのつもりはなかつた、と言つても、いつこういつとは今までに何回もあつた。といふが、毎回だ。平日はこゝきなり会つことになつて、匂の家に来るといふが、必ずとこつていいほどそのまま泊りコースになつてしまつ。

毎度毎度、今日は流されまこと、思つてゐるのだが、……手技、口技、寝技が得意な匂には、勝つことができない。

時計を見ると、午前一時過ぎだつた。

今から帰つても、あまつ眠ることはできないだらう。それには

「ん……」

匂がもぞりと動いて奈津美の体を抱きしめ直した。起きたわけではなく、やうしたらすくすくにまた氣持ちよさやうに寝息をたて始める。

「こなふうにされたら、腕をほどいて勝手に帰れない。

惚れた弱味といつやつなのか、彼氏が年下で、フリーターで金がないで、だらしなくて家が汚くて、こんな風にワガママに迫られ求められて……こんなダメ男でも、結局は許してしまつのだ。

「……あれ。ナツ、もう起きたの？」

翌朝、田を覚ました匂が、寝起きのかすれた声で言つた。

奈津美は、着替えて、出勤のために化粧をしていた。

「だつてもう七時よ。旬も起きなくていいの？」

奈津美は鏡に顔を近付け、アイシャドウを塗りながら、旬に言った。

「ん……今日バイト履からだし、まだいい。だるいし」
そう言つながら枕に顔を埋めた。

「……やつ」

奈津美は少し声を低くして言った。

だるいのは奈津美も同じだ。しかも、その原因是昨日の旬の『攻め』のせいであるのに…。

フリーターである旬とは違つて、正社員である奈津美は休んだり遅刻するわけにはいかない。別に悪気があるわけじゃないのは分かっているし、まさか旬本人には言えないが、こうこうことを言われると瘤に障る。

「あれ……ナツ、掃除したの？」

枕から顔を上げて部屋を見渡した旬が言った。

昨夜、掃除が中断され散らかったままだったはずなのに、今はもう綺麗に片付いてゴミ一つ落ちていない。

「うん」

奈津美はただ一つ頷いた。

今日、六時前に目覚めた奈津美は、そろそろ起きてシャワーでも浴びようかと体を起こし、ベッドから下りてゴミを踏んだ。そこで散らかった部屋を見てその状態に耐えられなくなつた。そしてまだ

時間があるからと思って、シャワーを浴びて、それから部屋の掃除をしたのだ。

奈津美が神経質すぎるせいなのか、朝っぱらから掃除をこなしてしまった。疲労感は一倍だ。

「あ、朝ごはん作つたから、食べたかつたら食べて」

台所には、ラップでくるんだサンドイッチが置いてある。匂の好きなハムとチーズのサンドだ。ちなみに皿に置かずにはラップでくるのであるのは、皿に置いても、それを匂がちゃんと洗つて片付けるか分からぬからだ。

「ちやんとワッピはゴミ箱に捨てるのよ? 分かつた?」

そこで考へて、ここで徹底的に言つて、奈津美に本当に毎に甘いと、自分でも思つ。

でも、年上として、母性本能が働くのか、自然と世話を焼いてしまつ。

「うん」

旬は返事をして、じつと田紅を塗る奈津美を見つめた。

「何？」
「匂」

奈津美は視線に気付いて、ちらつと一瞬旬を見てから、また鏡に集中する。

「ん……女人が口紅塗るところで、色っぽいなあつて思つて。でもナツのは他の人の三倍キレイ」

「もう……何言つひんの」
呆れたように笑いながら、照れ臭くて奈津美の頬は少しピンク色に染まった。

「あ。ナツ、今日、チューしてないよ」
旬は思い出したよつて言つて体を起こした。

「チューしよつ」

全裸のままベッドから下りて奈津美のそばに寄つてくる。

「もう……ラップ塗つてから言わないで」

「一回だけ一回だけ」

そう言つと旬は正面から奈津美を抱き締めて抱かれる前に唇を含ませた。

一回だけ……ではあるが、時間をかけ、何度も何度も角度を変えて舌を絡めた濃厚な口付けだった。

やつと唇を離した旬は、奈津美を堪能したことに満足気に笑つていた。

「もう……ラップ塗り直さなきや」

熱い口付けと抱擁の後でも必死に冷静を装い、出勤のために切り替えて鏡に向き直った。

「ナツ~」

「わわわ~」

旬が昨夜のように後ろから抱きついてきた。

「旬ー 離してっ。リップ塗れないでしょ！ …… やだ、ちょっと！ どこ触つてんの！？」

旬は奈津美の太股や腰周りを撫でるように触っていた。それは昨夜、ベッドの中でされた愛撫と同じようなものだった。

「ダメー！ あたし今から仕事なんだから…………」

「触るだけー」

そう言つて胸に手を伸ばした。

「やだつ…………あつ」

「ナツのエッチー。感度いいんだからなあ」

反応してしまった奈津美を見て、旬が一ヤ一ヤと笑つ。

「もうつー！ ふざけないでー！」

奈津美は真っ赤になつて口紅を持った手を振り、旬を引き剥がそうとした。

「あ…………」

勢い良く腕をふつた拍子に、奈津美の手から口紅が落ちた。もちろんキャップをつけていない。

床に着地した口紅は見事に根元からポツキリと折れてしまった。

奈津美は何とかいつも通りの時間に出社し、ロッカールームに入ることができた。

「おはよう、奈津美」

先に来ていた同僚のカオルが制服の身だしなみを整えながら奈津美に声をかけた。

「おはよう」

奈津美も挨拶し返して、カオルの向かいの自分のロッカーの鍵を開けた。

「あれ？ 奈津美、昨日と服一緒じゃない？」
カオルに言われ、奈津美はぎくじとする。

「あ、また例の年下の彼氏君の家にお泊り？」
カオルがにんまりと笑つて言った。

どうして女の勘というのはこうも鋭いのだろう。同じ女でありながら奈津美は思う。だが、奈津美の場合、これが初めてではないと「いつの」があつてばれたのかもしれない。

「平日からよくやるわねえ」

明らかに面白がっている様子でカオルは言った。

「ま、仕事に支障が出ない程度にね」
そう言ってカオルは先にロッカールームを出て行った。

奈津美も急いで着がえようとロッカーの中にかけてある制服をとる。

女性社員は制服が義務づけられていて、普段は面倒にも思つのが、じつは諸事情で一日連續同じ服の時は、ありがたく思つ。私服やスーツの場合、まさか男の家から直行という理由で、一日連續で同じものを着るわけにもいくまい。

制服を着て、奈津美はロッカーの戸の裏についている鏡を見る。口紅が少しほげている。

あの後、旬は何度も謝つていた。

「ナツゴメン！ 本つ当ゴメン！」
さすがに自分がふざけたせいだと思つたらしい。オロオロと慌てながら、ただ謝つた。

「もういいよ」

そこまで謝つているのだから責める気もおきず、奈津美はそう言ってティッシュで折れた口紅を拾つて床を拭いた。

「ごめん……」

奈津美の言い方がきつくなつてしまつたのか、旬は俯いて呟いて、まるで捨てられた犬のように切ない表情になつた。

「別に怒つてないから……もうこいよ、私も注意してなかつたし」奈津美は両手で匂の頬を挟み、顔を上げさせる。唇に奈津美の口紅がついていたのもティッシュで拭つてやる。

「じゃあ、行つてくるね」

顔をうんと近付け、軽く額と額を当つてそいつ言った。

「うん……行つてらつしゃい」

やつぱり少し切ない表情のまま、匂は奈津美を見送つた。

あれじや相当怒つてると思われたかもしね。いつもなり『何やつてんのー』『ぐらー』『うつから、逆に』。

しかし奈津美も急いでいたし、怒りつとこつ氣になれなくてああ言つたのだが……

「そりやアンタ、チューの一つでもわせてやればよかつたんじやない」

匂休み、社員食堂で今朝の出来事を力オルに話したら、そつ返つてきた。

「いきなりそれ？」

「それが一番怒つてないつて証明でしょ。それに相手だつて喜ぶし力オルはあつさつと言つて」

「確かにやうだけど……」

カオルの言う通り、旬ならそれで一発で機嫌はよくなるだらう。

「でも旬の場合、調子に乗りそつだし……ていつかあのリップだって買つたばつかでお氣に入りだつたし」

「何、やつぱり怒つてたの？」

「まあ……少しほね。でもリップ一本で本氣で怒るのも大人げないじゃない。まして年下に」

「ああ。確かにねえ……」

カオルは納得したように頷いた。

「それに……旬が調子に乗つたら……朝つぱりからシャレにならな
いし」

奈津美はそう言つてため息をついた。

「盛つてくんの？」

「盛つてくんの」

カオルの言葉の通りに、奈津美は頷いて答える。

「もう……たまにしんどくなる……年中発情期だし、頭の中にそれ
しかないんじやないかってぐらー……」

「そりやそりやでしょ。まだ十代なんでしょ？ 体も心も性欲で一杯
に決まつてゐじやない」

「ともなげにカオルは言ひ。

「でもいいじゃない？」「無沙汰よりはそれぐらいで。セックスレスって結構深刻な問題よ？」

明らかに匂から社員食堂で話すような内容ではない。カオルはこういつところはサバサバしている。

「それは……確かに、まあ……」

男女間のそれについて、どれほどの影響があるか、奈津美も十分知っている。

奈津美が匂の前に付き合っていた男とは、それが原因で別れたようなんだ。

そして、それがきっかけで、匂と出会い、付き合って始めたのだから……

「ていうか、アンタらの付き合ったきっかけが原因じゃないの？名前も知らないうちにホテル連れ込んでヤッちやつたんでしょう？しかも知らなかつたとはいえ、未成年を」

「ちょっと！ 人聞き悪いこと言わないでよー。誘ったのは向こうなんだからね！」

際どい言い回しをするカオルに、奈津美は身を乗り出すようにして言い返した。

「でも付いていったんでしょう？」

「それは……そうだけど……」

事実を言われ、奈津美の声は小さくなる。

「あ……もう。あたしつて何で匂と付き合つてるんだろ……」
「そう言つて奈津美はうなだれた。

「何、いきなり……」

「だつて、よく考えたら匂つて私の理想とは違つもん」

「奈津美の理想？ どんな？」

「年上で、落ち着いてて、誠実で、甘えられる人」

匂は、年下で、落ち着きがなくて、だらしなくて、いつも甘えてくる。全くの逆だ。

「でも甘えてくるのつて可愛くない？」

「そう言つて考えてみると、浮かんできたのは『ナツ』と言つて飛び付いてくる匂だった。

「……可愛いって言えば可愛いかもしれないけど……どちらかと言えば、犬？」

それも奈津美が想像しているのは、発情期の、だ。ぴったりかもしれない。

「犬だつたら十分可愛いじゃない」

「犬つていつても雑種ね。血統書らしきところは何もないから」

自分で言つて、匂の顔がどんどん犬らしく思えてくる。といふか、

旬はもともとが犬っぽい顔をしていましたかも知れない。

「血統書ねえ。彼氏君って浪人生?」

「ううん。現役で大学受験したけど、滑り止めも全部落ちて……でももう大学には行かないで働くって。……まあ、まだ就職できてなくてバイトだけだけど」

「言つてしまえば……すなわち旬はお金も地位も名誉も……良くも悪くもない公立高卒で学歴すらない。」

思えば思つほど、旬がダメ男に思えてくる。

「あ、ごめん」

ポケットの中の携帯がバイブの振動をし始めて、奈津美はそれを取り出した。

メールがきている。携帯を開いて操作し、開いてみると、旬からだつた。

『ナツ』

今昼休み?俺は今からバイト

朝はホントごめんな?

サンドイッチめちゃくちゃウマかったよーさすがナツだな ありがとな!』

サンドイッチ一つで、ベタ讃めだ。それにしても、やつぱり、まだ怒つてゐると思われるのだろうか……

『どういたしまして

朝のことは本当にもう怒つてないよ
バイト頑張つてね。ちゃんとしていくんだよ?』

手早くそう打つて、可愛い絵文字もふんだんに使って、すぐに返信した。

「彼氏君?」

カオルがにんまりと笑つて聞いてきた。

「何で分かつたの?」

「だつてねえ……」

再び携帯が震える。早い。匂からだ。

『うん! ナツ最高!! 愛してる』

ハートマークを無駄に多く使つてゐる。画面が真つ赤だ。匂が嬉しい時など、こういうメールが多い。奈津美はあれだけしかメールを返してないのに、単純だ。でも、分かりやすい。

「顔、ニヤけてる」

「え! ?」

カオルに指摘され、奈津美は画面から顔を上げた。

「その顔見たらすぐ分かるわよ」

そう言われて、奈津美は顔が赤くなるのを感じた。

「これは、旬の唯一のいいところなのかもしない。」

旬は、普段の生活はあんなにもだらしないのに、マメなところがある。メールや電話は一日一回は旬からくれる。今朝のサンディッシュのこのよひこ、些細なことでも誉めたり、お礼を言つたり……それに奈津美は『キュー』となる時がある。普段がああなだけに、そのギャップがあるのだろうか。

奈津美は、旬のそういう部分にやられているといつのも確かだつたりする。

3 一人の始まり（前書き）

時は遡り、奈津美と旬の出会いの話です。

3 一人の始まり

約一年前……

奈津美はある居酒屋のカウンターで、一人で飲んでいた。一人でビール、焼酎、日本酒のグラスを、少々無茶なペースで空けていた。

「お客さん……ちょっと飲みすぎじゃないですか？」

空いたグラスを下げながらやつやつと奈津美に声をかけたのは、その居酒屋でバイトしていた旬だった。

「何。客に文句つける気！？」

その時の奈津美は荒んでいて、店員の旬を鋭く睨んだ。

「何よ。一人で飲んで淋しい女つて思つたんでしょう？」

そのへんの酔っ払い親父やヤンキーと何ら変わりなく、奈津美は旬にいちゃもんをつけた。

「え……いや、そんなことは……」

「思つたんでしょう。正直に言つてなさいよ。」

「まあ……少しだけ……」

客に対してもう少し気を使つていた旬だったが、根が良くも悪くも素直な性格のため、詰め寄られて頷いてしまった。

「ちょっと座つてー。」

奈津美は旬の腕を無理矢理引っ張つて隣に座らせた。

「あたしだって好きで一人で飲んでるんじゃないわよ。昨日、男と別れて、しかもこういう時に限つて友達面接トークだし……飲まなきややつてらんないっての！」

「はあ……」

いつして、閉店までの三時間、奈津美は名前も知らない男に愚痴をきかせてやつたのだった。

これが、一人の出会い……

あの時は、おかしかつた。

元彼と別れたことが、ショックだつたとか言つよりも、悔しかつた。それを旬にぶつけていた。

「だつて……一ヶ月ぐらい前から何もしてこなくなつたのよ？ 家に泊まりに行つても、夜、隣で寝てても『今日は疲れてるから』とか言つて相手してくれないのよ？ 何かおかしいって思うじゃない。だから昨日会つた時、最近冷たくない？ つてそれとなく言つたの。そしたらなんて言つたと思つ？」

「はあ……」

「『何が、君じゃ何も感じないんだよね。もしかして、不感症？』『はあ！？ 何好き勝手言つてんのよー。いつちだつてあんまり気持ちよくなかったわよー。でもそれはアンタが下手だからでしょー！』

酔っていたせいで、普段女友達にも滅多にしない、かなりの下ネタ発言をしてしまった。

その時のことば、奈津美の記憶にも残っているのだが、その時はよつほど頭にきていたらしい。理性が止めよつともしていなかつた。後になつて思つと恥ずかしい。

「それ言つたの？」

それまで相づちだけを打つていた匂が、初めて口を挟んできた。

「言つてない」

「言えよかつたのに」

「言われた時はそこまで頭回らなかつたのよー。いつこいつのつて後からくるからムカつくー！」

奈津美は怒りに任せて匂の腕を掴み、思いつきり揺さ振つた。

「もうそれだけが心残りなのー。絶対忘れられないわよ、あの男ー！」

「お客様、そろそろ看板なんだけどね。そいつもやれやろ解放してやつてくれないか」

カウンターから店長らしき中年男性が声をかけてきた。

後から聞いた話だと、匂はその日、バイトを上がる時間がもうとつくに過ぎていたらしい。それを奈津美が引き止めた形になつてしまつたのだ。

「悪かったな。今日の分、給料に上乗せしどからよ」
店長は匂にせつ置いて、店の奥に消えて行った。

「マジっすか？ やつたゞ儲けへ

匂は、単純に喜んでいた。

「んじや、お姉さん。お勘定……」

そう言つて匂が立ち上がつたが、奈津美は匂の腕を掴んだままだつた。

「……ない」

「え？」

小さく呟いた奈津美の声が聞き取れず、匂は、奈津美の顔の高さに屈んで、顔を覗き込んだ。奈津美は、不貞腐れたような表情をしていた。

「……帰りたくない」

「えへ……わすがにちよつとそれは困るつて、お姉さん……」

さすがに匂も、早く帰りたいと思つていて、奈津美の言葉に、苦笑いだつた。

「だつて……帰つたら一人で急に現実に戻されて……絶対に自己嫌悪しちゃうもん」

匂は、田を白黒させていた。

「だつたら飲まなきやいのこ」

「この時、旬が言つたことは正しい。しかし、後になつて、旬にまでそう言われてしまつたという、少し情けない思い出に変わつた。

でも、後からは『何であれぐらいのこと……』というものになつても、その時は本当にどうしようもないぐらいの気持ちだったのだ。

「分かつてゐるわよー でも飲まなきゃやつてらんないんだからしうがないでしょー」

そう吐き捨てるよつたにして、奈津美はグラスに少し残つていた焼酎を飲み干した。

「分かつた」

旬がいきなり言つて、奈津美は意味が分からず旬を見た。

「一人になりたくないなら、ホテル行く？ 僕と……」

それが明らかに、少なからずも下心を含んだものだということは、酔つて意識が混濁していた奈津美にも分かつた。なのに、やつぱり理性が働くかず、それよりもやつぱり一人が嫌という気持ちが勝つてしまつた。

奈津美はその誘いに承諾そのまま旬についていき、まだお互いの素性を何も知らぬまま、一人は男女の関係になつた。奈津美はその時の記憶は、全くない。

翌朝、奈津美はホテルのベッドの上で目を覚まし、見慣れない天井に、裸の自分、その隣に眠る裸の男を見て混乱した。

そしてすぐにその男も目を覚まし、

「ナツミさん、起きた？」

体を起こしながら言った。なぜか匂は奈津美の名前を知っていた。

「何で名前知ってるの……？　ていうか、誰？」

奈津美が必死にシーツで裸の体の前を隠しながらそう聞くと、「ナツミさんから聞いてきたのに～？　もしかして俺の名前覚えてないの？」

残念そうな顔をした匂は奈津美は黙つて頷いた。

「……ていうか、私達……やつちやつたの？」

「いや、ベッドにそれらしき痕跡も残っている明らかな状況で、奈津美はそう聞いた。

「うん」

匂は、嬉しそうに頷いていた。

「すっげー良かつたよ。ナツミさん、めちゃくちゃスタイルいいし、感度最高だし。不感性とか言った男、バカだなあ」

それを聞いて、顔が熱くなつた。

そして、昨夜、酔つて乱れて、居酒屋の店員に散々愚痴つて、最

終的にホテルに誘われたことを、今更になつてやつと思つ出した。

「ナツミさんも気持ち良さうだつたし、やっぱ下手だつたんだよ。元彼と別れて正解じゃん」

「「「……」めんなさい……」

意味もなく、奈津美は謝つた。辺りを見回して、自分の服を探した。

「なんか酔つて迷惑かけちゃつて……」

ベッドの下の方に、バスローブを見付け、とりあえずそれを掴んで羽織つた。

「り、料金は払つかり……本当に」「めんなさい……」
そう言つてベッドから下りつとした。

「待つて」

奈津美の手首を、旬が掴んで引き止めた。

「え……？」

奈津美はただ意味が分からず、混乱した。

「ナツミさん。俺と付き合つて」

旬からの告白は、とても突然だつた。

「え？」

奈津美は驚いた。目を見開いて旬を見ると、とても真剣な顔をしていた。

「順番逆になつたけど……でもそのおかげで惚れたつていうか。だから俺と付き合つて」

とても熱烈的な告白だった。しかし、奈津美はやっぱつ困惑して、固まつてしまつた。

「何言つて……」

奈津美がそう呟くと、旬はその場に正座をし、頭を下げた。

「俺と付き合つてやること お願ひします」

全裸で土下座（下半身の大事な部分はシーツで隠れていたが）……はたから見たら、あまりに滑稽な姿だ。奈津美にも、どうしたらいいのか分からない。

「ちよつ……やめつて。顔上げて……」

狼狽えながら奈津美はそつと言つた。

「やだ。ナシ!! ちよがいいつて言つままでこのままでいる」

むりやくじやな」とを言つていた。これには奈津美も焦つた。

「そんなこと言われても……ねえ、とつあえず一回顔上げて?」

そう言つて奈津美は肩を揺すつたが、顔を上げようとは全くしない。

「ねえつてば……ねえ、もういいから」

その言葉に、旬はすかさず顔を上げた。

「いいの?」

見開かれた目は、とても輝いていた。

「え…？」

奈津美の方が驚いた。

「あー、せつこう意味じゃなくて……」

「やつた――――！」

奈津美の訂正を聞く前に、旬は奈津美に飛び付き抱き締め、そのまま押し倒した。

「さやつ！ やだ……せつじやなくて……つん！」

倒されて抵抗しながら、奈津美は言葉を紡ごうとしたが、旬の唇によつてそれが阻まれた。

「すつげー嬉しい！ ナツミちゃんが俺の彼女になるなんて」
唇を離して、奈津美を見下ろす旬は、言葉通りに嬉しそうで、少し可愛い感じの顔をして笑っていた。

奈津美は、その顔を見て、不覚にもドキッとしてしまい、何も言えなかつた。

勿論、奈津美が『いい』と言つたのは、付き合つても『いい』という意味ではなく、気持ちは分かつたからそんなことしなくて『いい』、という意味だ。

「あ、付き合つんだつたらナツミちゃんつてさん付けじやなくていいか。ナツミ……ナツ。なあ、ナツつて呼んでいい？」

なのに旬は、完全にいい意味で取つて、つまづかと勝手に話を進め、そりやつて聞いてくる。

「うん……」

奈津美は、頷いてしまった。

だが、この状況は、旬の表情は、奈津美にそれ以外の言葉を発するのを許していなかつた。

「ナツ~」

早速旬はそう呼んで、奈津美の脣、額、頬などに軽く音をたてて口付けていった。

それが、不思議と嫌ではなかつた。

元彼が元彼だつただけに、食えているのかもしれないと思つた。

……まあ、なんとかなるだろ~。

奈津美は流されながら、そう自分に言い聞かせて、旬と付き合つことにしたのだった。

この後、やつとまともに名前を聞き、年齢を聞いて自分より四つも下だということに驚いて（少し幼い顔立ちだったので年下だらうとは分かつたが、身長があつてガタイがわりとしつかりしていたので、そもそも居酒屋でバイトをしていたので二十歳ぐらいだと思つていた）、職業柄も聞いて驚いて（その時はまだ卒業式を間近にした高校生だつた。しかも、大学に落ちてフリーターが決定していた）、付き合い始めて暫くして、初めて行った旬の部屋の汚さ、生活のだらしなさに驚くことになるのだった。

4 難しい彼氏

仕事の帰り、奈津美は家までの途中にあるドラッグストアに寄つた。

新しい口紅を買うためだ。しかし、折れてしまつたのと同じ、奈津美が好きなブランドの欲しい色が無かつた。仕方なく別のものを買つて、奈津美は店を出た。

冬の夜の空氣に、奈津美は白いため息をつく。

やつぱりショックだ。別に旬を責めるわけではない。責めてもしようがない。それは何度も思つてゐる。

思つてる時点で責めているようなものかもしけないが、絶対にそれを表に出すわけにはいかない。

少なくとも、旬の前では。

それは、年上としての意地と言つてもいい。

何となく、なのだが、奈津美には、年上なら年下に対しても、寛容でないといけないという意識がある。年上なら、年下に対しても常に余裕を持つて、冷静で、しつかりしていようと思つてゐる。

旬の前でも、一応は年上のしつかり者として振る舞つてゐる。出会いが出会いなだけに、そつする必要なんてないのかもしねりが

年上女と年下男の場合、付き合い方が難しいと奈津美は思つ。年

……

下の男と付き合つのは、旬が初めてだ。だからよく分からない。

例えば、食事に行つたりした時なんかがそうだ。

会計の時、旬とだと、奈津美の方が多い払つことが多い。旬は、男だからと払いたがるのだが、年下に奢りせるのは、何だか気が引けるのだ。

まだ旬がちゃんとした職に就いていたら別かもしれないが、フリーターで金欠の時が多い旬に払わせるわけにはいかない。

こんなこと、今までにはなかつた。

今まで付き合つた男は、同じ年か年上で、同じ年の場合は殆どが割り勘、誕生日とか特別な日だけは、奢つてもらひ。年上だと、奢つてもらひのが当たり前という感じだ。

勿論、同じ年にしる年上にしる、奢つてもらひの前提でいるわけではなく、まずは断るし、少なくとも少しあはうとする。

それでも『今日は誕生日だから』とか『普通は男が払うもんだろ?』とかさりげなく言われたら、女の立場に甘えてしまえる。

ところが年下の……旬との場合どうできない。安心して、甘えることができない。

一度、旬と出掛け、昼食にパスタの専門店に行つた時のことだ。ファミレス並の安価だったので、二人合わせて一千円以下だった。これくらいだから、奈津美が全額払おうと伝票を持って、会計を済ませようとレジへと行くと……

「俺が払う」

と、いきなり旬が言いだした。

「いいよ、これくらいだし」
一応匂がそつぽつのはこつものことなので、奈津美は軽くあしらつた。

しかし匂は、

「これくらいだから俺が全部払う」と、財布を出そつとする奈津美の手を押さえた。

「いいつてば。匂、お金ないんでしょ？」

いつも大体そのので、奈津美はもつ自分が払つつもりで匂の手を退けよつとした。

「今日はあるよ。一昨日給料日だつたから」
珍しく強く匂は言つて、奈津美の手を離そつとしない。

「でも家賃とか払つたりしたらすぐなくなるつて言つてたじやない。気持ちはず」い嬉しいから。だから手、離して」

「やだ」

本当に珍しかつた。匂がここまで強固な態度をとるなんてことは、あれが初めてだつたんじやないだろうか。

「……分かつた。じゃあ匂の分だけ払つて？ あたしも自分の分払うから」

無難に割り勘にしようつと、奈津美は匂にそつ言つた。

しかし、

「やだ。ナツの分も払う」
と、まるで我儘な子供のように匂は聞かなかつた。

「……だから匂の分だけでいいってば」

奈津美もここはとりあえず匂の匂の通りにしておけばよかつたの
かもしれない。しかし、奈津美も奈津美で強情に首を縦に振らなか
つた。

「俺が払う」
「だからいいじつてば」
「あ、いいつて言った」
「そつちのいいじゃない！ もつつ匂ー！」

子供のような言葉の応酬が続き、いい加減イライラしてきた奈津
美は、キッと匂を睨んだ。

「…………ふつ」

二人の匂の前で、吹き出す音が聞こえた。

「あ、すつすいません！」
レジを担当していた若い女性の店員が、顔を真っ赤にして俯いた。
その肩はふるえている。

無理もないだろう。匂の前で、カップルがこんな馬鹿な言い争い
をしていたら……それも、男と女の立場が逆なのだから。
この店員も、客の手前、相当我慢して吹き出したのだろう。

奈津美は、顔から火が出る思いがした。

あれは今思い出しても恥ずかしい……

旬も、きっと彼氏としての自覚のようなものがあつて、ああしたのだろう。それは本当に嬉しいのだが……もつちよつとさり気なくしてほしい。あんなに強情にならなくたつても……
それは奈津美も同じだが。

よく考えたら、いくら相手が年下だからといって、あそこで素直に甘えられない女なんて、可愛いいげがないのだろうか。といふが、旬の前での自分は、可愛いいげの『か』の字もないじゃないかと、今更になつて奈津美は気付いた。

いつもピリピリして、小言を言つて、気付けば『もつつー』といふのが奈津美の口癖になつていて。

確かにこれが奈津美の気性ではあるが、男の前でこれはないだろう。せめてもう少し、作つてでも可愛いといこうを見せるのが普通じやないだろうか……

どうして旬は、こんなに可愛いいげのない自分と付き合つているのだろう……

考えていると、そんな疑問が湧いてくる。

「ナーツちゃんつ

突然、そんな聞き覚えのある声がして、後ろから何かがのしかかっ

「こんなことをするのは奴しかいない。それに」の声……
てぐるよつな衝撃を受けた。

「匂……？」
「当たり……」
「機嫌な声が返つてぐる。顔を横に向けると、すぐ横に匂の顔がある。

「もう……匂！」
早速口癖が出てぐる。それに対し、匂はへへっとしまりのない顔で笑つた。

「ナ～ツ～。こんなところで会いつとか嬉し～」
匂はそう言つて、奈津美を後ろから抱き締める。もし本当に匂が犬なら、千切れんばかりに尻尾を振つてゐるに違いない。

「もう……恥ずかしいから離して」

奈津美はそう言つて、体に巻き付く匂の腕をほどいた。

勿論、ここは街中で、人の目も多い。皆ちらちらと一人の方を見ている。

「匂……誰か確認しないでいきなり飛び付くのはやめてつていつも言つてるでしょ。間違つてたら変質者になるじゃない」

「そう……」うづうづ」とも初めてではない。

匂は、所構わず、奈津美を見つけると、それこそ犬のよつに飛び

付いてくるし、しかも奈津美を驚かすためと、まざ声をかけるとか、確認をしようとした。

「俺がナツのこと間違えるわけないじゃーん」
旬はいつも笑顔でそう言つたが、他では本当に間違えたことがないのか、不安になる。

「ナツ、何してんの？ 帰るといひの？」

「うん。旬は？」

「俺はバイト。途中まで一緒にいく」

旬は奈津美の返事を聞く前に、奈津美の手をとった。

「うわっ。ナツ、手え冷た！」

旬が驚いたように言って、奈津美の冷えた指先を握つた。

「じゃあ……」

旬は奈津美の指を絡めて手を繋ぎ、その手を自分のダウンジャケットのポケットの中に入れだ。

「これでよし！ あつたかい？」

旬が奈津美にそう聞いてきた。

「うん……あつたかい」

奈津美は素直に頷いた。旬は、それを見て、満足そうに笑つた。

本当に、暖かい。旬の手の熱が、奈津美の冷えた手に伝わっていく。ポケットの中も、旬の熱が籠もつていて、奈津美の手全体が旬

の温もりに包まれてゐるみたいだ。

「うう、カップルだと当たり前、ということが、奈津美は好きだつた。学生時代に学生同士だつたら当たり前にしていただけれど、社会人になつたらなぜかそういうことをしなくなつた。

多分周りの目も気になつて、互いに気恥ずかしいといふのがあつたからだろ？

でも、匂との場合は違つた。むしろ、匂がそういうことをしたがる。

そういえば、パスタ屋での出来事が原因で、それを知つた。

「もひつー、匂のせいです、く恥ずかしかつた！」

パスタ屋を出て、二人は街中を歩きながら話していた。というか、奈津美が例の如くピリピリとしていた。

結局、あの場は奈津美がさつさと会計を済まし、逃げるように店を出た。他の客もかなり注目していらしく、笑い声が聞こえた。

こんなに恥ずかしい思いをしたのは、本当に初めてだつた。もうあの店には行けない。そう思つていた。

匂を見ると、不機嫌そうな顔をしてゐる。なぜだか全く分からなかつた。

「……匂。そんなに払いたかつたの？」

「Jの時は本当に、幼稚園児かと思つた。何でJはぐいこのJほどこんな喧嘩したような空気になるのか……」

「ナツ。俺つてナツの彼氏だよな?」

「きなりJはそんなことを言つだした。

「何言つてんの? そういうの?」

「どうか、Jが勝手にそういうことにしたからじゃないのか。そういう思いながら奈津美は言つ返した。

「だつて……何か違うじゃん。メシとか、いつもナツが当たり前のように払つし」

その言葉に奈津美は丸くした。

「確かに、俺、金ないけど。さつきみたいに俺が出すつて言つても、断つて、ナツが払つちゃうし。……それに、デートの時、手も繋いでくんなし。今も俺側の手で鞄持つてるし」

「えつ……」

言われてみて、奈津美は確かに、そつだと氣付いた。

今まで、何回かデートしたが、本当に一緒に出掛けで並んで歩くだけで、特に何ということはなかつた。しかし、Jは何年かの奈津美にとっては、それが当たり前になつていた。

「ナツつて、そういうの嫌いなの?」
Jのその言い方は、少し寂しそうだった。

「えつ……あ、別にやつこうわけじゃ……今までやつこう習慣なかつたから……」

「……やつこうとをやつのは恥ずかしくて、奈津美は少し下を向いた。

「……嫌つてわけじゃない？」

旬は奈津美のことを見き込むようにして聞く。

「うん」

奈津美は小さく頷いた。

「じゃ、繫い？」

旬はやつて手を差し出した。

奈津美は、黙つて、少し緊張しながら旬の手を、ぎこちなく握つた。

「へへへ」

旬は、これだけで、やつ今までの不機嫌そうな表情と打つて変わつて、とても嬉しそうな顔をして笑い、奈津美の手を握り返し、指を絡めた。

奈津美も、これだけのことだといつのに、嬉しかった。久しぶりだつたからだらうか、まるで初めて付き合つた人と初めて手を繫いだ時のように、胸がときめいていた。

「やつこうといいな。と、初めてしみじみと感じていた。

思えば、旬と付き合い始めて、そういう純粹で素朴な恋愛も味わつている気がする。

やつぱり、旬が自分より若いからなのだろうか。そういうと、奈津美は自分が急に老けたように思える。

「旬、今からどうのバイト？」

自分のネガティブな思考を、奈津美は何かを話すことで誤魔化す。

「居酒屋だよ。」

「……居酒屋って、あの？」

「そう。あの」

旬は、ニヤッと笑う。

それを見て、奈津美は話題を間違えたと後悔する。

旬が今から向かうバイト先は、約一年前、一人が出来た居酒屋だ。

「まだ続けてたの？」

「うん。あそこ時給わりといいし。店長も氣前いいし。あ、ナツのこと今度連れてこいつて言ってたよ。ナツ、全然行つてないんだろ？」

「当たり前でしょ！ 恥ずかしくて行けるわけないじゃない！」

あの居酒屋は、ナツの自宅のすぐ近くなので、わりと頻繁に行っていたのだが、あの日以来、一度も行つてない。

「ていうか、店長、あたしたちのことが知ってるの？」

「うん。 だつて俺、言つたし」

「もー……頗るなくていいのに」
奈津美は顔を赤くして言つた。

「あ。 そーだ。 今度行つたらさ、また帰りホテル行く?」

旬はニシと笑つて言つた。

「もうー。 何言つてんのー。 あたしは行かないからねー。 ていうか、
あの時のことは忘れてつづば」

「普通彼女との初めてのエッチのこと忘れられるわけないじゃーん
? ナツは忘れてるみたいだけどさあ」

「もうー。 旬ー。」

街中で普通に変なことを口にしたことと、その内容に対し、奈
津美は更に顔を赤くして旬をキッと睨む。

「本当、あん時のナツ可愛かつたなあ」

旬のその発言に、奈津美は目を丸くした。

「あ、今もめちゃくちゃ可愛いけど。 つつか、ナツはこいつビンで向
しても可愛い」

そう言つて、奈津美に笑顔を向ける。

「ビンが?」

無意識に奈津美は聞いていた。

「具体的に、どこが？」

旬の感覚はおかしいと思う。旬といふ時の自分は、一番可憐くないはずなのに。そもそも、そんな自分と付き合つてこる時がおかしいのか……

「え……そんなの恥ずかしくて言えなって」

旬は、照れたように頭を搔いた。

「いいじゃん。何でもー。何がにじる、俺がナツのこと好きなのは変わんねえもん」

旬の顔が、少し赤い。奈津美もつられて顔を赤くした。

多分、こんな自分を好きだといふ旬は、相当な物好きだと、奈津美は思った。

そしてそれは、そんな物好きと付き合つている、奈津美も同じだ。

5 理想と現実

とある居酒屋で、奈津美は飲んでいた。

居酒屋、と言つても勿論、旬のバイト先のではなく、流行の小洒落た居酒屋だ。それに、今日はカオルと一緒に。

「ごめんねー。付き合わせて」

酎ハイで乾杯をした後、カオルが言った。

「いいよ。全然。暇だつたから。それよりよかつたね。早めに決まつて」

「うん」

奈津美の言葉にカオルがにっこりと笑う。

今日は、カオルの買い物に付き合つた。カオルの彼氏に渡すチョコレートを選ぶためだ。もうすぐくる、バレンタインデーのために。

「そういえば、奈津美は買わなくてよかつたの？ あ、もう用意してるの？」

唐揚げを箸で摘みながらカオルが尋ねた。

「ううん。旬には作る予定だから」

そう答えて奈津美は酎ハイを一口飲んだ。

「へー。手作り。やるわね」

カオルは感心したように奈津美を見た。

「だつて、旬にあんな高級なものあげてもすぐなくなるもん。質よ

り量だから満足しないだろう」

奈津美とカオルが今日行つてきたのは、有名な高級ブランドのチョコレート専門店だ。小さな一粒が何百円といつ、高価なものだ。カオルも、一箱六粒なのに五千円といつ、信じられないほど高額なものを選んだ。

「こんなに高いの買うの？」

と、奈津美が目を丸くして言つと、

「彼、あんまり甘いもの好きじゃないし、一ヶ月後には倍以上になつて返つてくるから、安いもんよ」

と、カオルは笑つた。

つまり、ホワイトデーのお返しが豪華だから、これぐらいの出費は痛くない。そういうわけだ。

カオルの彼氏は、年上で国立大卒、一流企業のエリート社員……高学歴、高収入の男だ。ちなみに顔もなかなか男前だ。

「何作んの？」

「チョコレートケーキ。旬、ケーキ好きだから」
カオルに聞かれて、奈津美はそう答えた。

「ケーキって……ホールで？」
カオルは、まさか、という顔をする。

「うん。旬つてケーキ好きっていうか、甘いものが大好きなの。旬の誕生日も、ケーキ食べたいっていうから作つたんだけどね、流石にホールでは作りすぎたかなあって思つたら、殆ど一人で完食しちやつたの」

「一人で？」

カオルは目を丸くしている。

「そう。しかもそれで平氣だし。もう、見てる方が氣分悪くなつたわよ。……ケーキバイキングとか行く時、誰よりも目が輝いてるしちょつと恥ずかしいくらい」

その時のことを思い出して、奈津美はため息混じりに言つた。

「へー……ケーキバイキングとか行くの」

カオルは何故かそつちの方に食い付いた。

「まあ、たまにね。旬が行きたがるから」

「いいなあ。あたしもそういうデートしてみたい」

カオルは、本当に羨ましそうに言つた。

「え、何で？」

奈津美にはカオルの気持ちが分からず、聞き返す。

「だつて楽しそう。そういう所つてさ、一緒に入つていい男と良くない男いるじゃない」

まあ確かに、と奈津美は思つた。

ただでさえそういう店は女性客が多いわけだし、奈津美達のよう

にカップルもいるにはいるが、正直、男は浮く。カオルの彼氏は明らかにそつだるつ。というか、そもそもケーキバイキングとか、そういうものが似合わないような、大人だ。

「でも旬と行くのは、あんまりお金ないからだもん。カオル、贅沢だよ」

確かに旬は、男のくせにそういう店に溶け込んでいるが、それが彼氏としていいのかは別だ。

「奈津美だつて贅沢でしょ。ていうか、何だかんだで彼氏君の話ばつかしてるし」

「そつそんなことないし！」

カオルに指摘され、奈津美は顔を真つ赤にしてしまった。

「で？ 十四日はお泊まりなの？」

カオルはにんまりと笑い、興味の方向を変える。

「泊まらないから。平日だから、会つて渡すだけ」

奈津美はそう言つてクールに返す。

「えー。つまんない

「つまんないつて……あたしは娯楽？」

唇を尖らすカオルに、奈津美は呆れたように返した。

「だつておもしろいから。彼氏君の話

おもしろいと言われても、あまり誉められたような心地がしない。

「ていうか、そういうカオルこそどうなの？ 十四日、会つてお泊まりしないの？」

いつも人のことは聞くくせに、自分のことは言わないカオルに、今日は奈津美が突っ込んでみる。

「だつてあたしは会わないもん。十四日」「カオルからはあつさりそう返つてきた。

「彼、十四日に急な出張入っちゃつたから、その日は会えないの。ま、代わりに週末はそれなりに楽しむけどね」

ふふつとカオルは何か含みのある笑い方をする。

それは、大人の時間を楽しむ、という意味らしい。

「あ～あ。本当、いいなあ」

奈津美は溜め息をついて、再度そう言つた。

実は、奈津美の元カレとカオルの彼氏との出会いは、同じだつたりする。

一年半ほど前、カオルの知り合いが何かのツテで、その二人が勤めている会社の男前男性社員との合コンに行つて知り合つた。

向こうも二人が友人同士らしく、始めは四人で話していただが、暫くして、片方（カオルの今の彼氏）がカオルのことを気に入り、カオルもまんざらじゃないという感じで仲良く話しだした。仕方なく、奈津美はもう片方（奈津美の元彼）と話していく、まあ何とか打ち解けてきた頃、カオル達は付き合つことになつていて、じやあ俺らも付き合おうか、と言われて奈津美達も付き合い始めた。

そして、奈津美らは一年前に別れたがカオル達はまだ順調に続いている。

「Jの差は一体なんだろうか。その場の雰囲気で付き合って始めたせいだろうか。貧乏くじを引かされてしまった気分だ。

「でも奈津美、何だかんだ言いながら長いこと付き合つてるじゃない。それはやっぱり奈津美も彼氏君のことが好きだからでしょ？」

「まあ…… そうなのかな」

そう言えば、前の彼氏は、一応奈津美の理想通りだつた。年上だつたし、落ち着いた雰囲気だつたし、別れの発端となつたことがあつた以外は基本的に誠実だつたし…… 少なくとも、奢る奢らないで言い争うようなことは一度も無かつた。……なのに付き合つたのは半年も経たないぐらいだつた。

旬とは…… 何だかんだで一年続いている。実はこれは、今までの奈津美の恋愛遍歴の中で、一番長い。

これには、奈津美自身驚いている。そして疑問だ。

「奈津美。理想と現実は違うわよ。理想の人間が自分に合つ人間かは違うからね」

カオルが、諭すようにそんなことを言った。

ということは、旬は自分に合つ人間だということか…… こんなに文句ができるのに。

不思議な話だ。

「 わいこやシユノヒセー 」

不意に耳に入った言葉に、奈津美はピクリと反応して、隣を向いた。

「 どうしたの? 」

奈津美の動きに、カオルが尋ねた。

「 あ……「つん。なんか匂の名前が聞こえた気がして……」

奈津美がそう答えると、カオルがいつものようににんまりと笑つた。

「 へえー。自分の彼氏の「」とだつたら耳聴いわねえ 」

「 もつそんなわけじゃないわよつ。それに多分、聞き間違いだしつ 」

奈津美は慌てて否定した。

本当に、思わず反応してしまったことが恥ずかしい。『シユン』なんて別に珍しい名前ではないのに……

「 シュンつてどこのシユンだ? 」

「 オキタだよ、オキタシユン 」

隣からの声を聞き、奈津美は固まる。匂と同じ名前だ。

「匂かも……」

「え？ 居るの？」
カオルが隣を向く。

「ううん……」

「」の店は、一つのテーブル」とに衝立てのよつなもので仕切られている。座つた時の頭の高さほどのそれを、奈津美は背筋を伸ばしてそつと隣を覗いた。

奈津美の座高ではあまり見えないが、向こうが男三人ということが分かつた。背の高い、それぞれ違う種類の茶髪の頭が三つ見える。

「旬の知り合い……っぽい」

髪型の感じや、先程聞いた声で、旬とそれほど年が変わらないだろ？と奈津美は推測した。

「ああ。旬なら最近会つたぞ」
三人のうちの一人が言った。

奈津美は、そして野次馬根性を働かせたカオルまで、衝立ての方に耳を寄せている。まさに壁に耳、という状態だ。

「マジ？ ビーで？」

「あいつの家。俺、高三の時にシュンにCD貸してさ、それがないと思ってたらあいつ、返すの忘れてたとか言ってこの間メールよこしたんだ」

「あー… シュンのヤツ、そのへんいい加減だよなあ。漫画とかすぐ
に返ってきた試しないぞ」

……ちょっと、旬らしいといつ影が見えてきた。

「あいつの部屋マジで汚ねえから、貸したもんは大概あいつの部屋に埋もれるんだよな」

「旬だ」

奈津美は小さく呟く。『部屋が汚い』で確信した。

「」の辺りの一十歳前後の男で、貸したものが返つてこないようないい加減さで、物が埋もれるほど部屋が汚いオキタシコンは、奈津美の彼氏の旬しかいない。

「つうか、その旬が一人暮らし始めててわ」

「旬があ！？」

「うわ～……あいつ一人で汚してそ」

ええ。いつも一人で有り得ないぐらい汚してますから。……と、驚いている旬の友人達に対し、奈津美は心中で同意する。

「それがさ、行つてみたら普通だつたんだよ。むしろ綺麗にしてあつてさ」

「マジで！？ あいつ掃除できんの？」

「俺もそう思つてマメに掃除とかしてんのかつて聞いたりさ、彼女がしてくれるんだつて」

「彼女あ！？」

「彼女つて、ミキ？」

「どうやら、話が奈津美のことになつたらしい。それにしてもかなりの驚かれようだ。」

「ミキ……？」

女の名前をしきものに奈津美は反応する。

「違う違う。ミキのすぐ後」

「ミキとは別れたんだろう？ 句が大学全部落ちたのが原因で別れたつて聞いたぞ」

「マジで？ 何だそれ」

本当に何それ……と、奈津美はまたもや内心で突っ込む。

ミキ、とは元彼女のことらしい。句からはそんな話が出ないから知らなかつた。出ないのが普通なのであらうが。
それにも、大学不合格が原因つて……

「で、新しい彼女ってどんなんだ？」

奈津美の思考はさておいて、隣の話は句の彼女、奈津美のこととなる。

「それが年上なんだとよ。俺らの四つ上の〇」

「はあ！？ 今度は年上かよ」

「しかも旬好みのボンッ、キュッ、ポンッ。推定で上から90・5
9・8・6のEカップ」

「マジで！？」

「何で知つてんの！？」

思わず飛び出しそうになるぐらいい奈津美は驚いた。

奈津美は、実は中々グラマラスな体型をしている。腹や太股、二の腕などはすつきりしてるのだが、胸や尻には、その分の脂肪が悩ましいつき方をしている。

街に出ると、男が振り返つて見るし（奈津美に自覚はないが）、
社内ではセクハラの対象にされる（もつ何とかやり過ご）しているが
。それぐらいの魅力的な体をしている。

それはともかく、何で旬は、本人だって正確には知らない奈津美
のスリーサイズを、ほぼピッタリ当ててしまつたのだ。確かに、し
ょつちゅう見て触つてはいるが……

ていうか何でそれを友達とかに言つのよー

奈津美の顔は恥ずかしさで赤くなる。

「あのオッパイ星人、昔からそこしか見てねえよな。付き合つ子み
んな胸でかかつたし」
呆れたような声で言われている。

『オッパイ星人』

旬に対してその表現は、妙にしつくりきた。もし旬が彼氏じゃな
ければ、笑える。現に目の前ではカオルが笑つてはいる。

「でも今回はすっげーその彼女のこと絶賛してたぞ。『あのオッパ
イはマジです』『』って！ 神様の芸術品……いや、つうか、あれ自
体が神様……オッパイの神様そのものだつて！』って意味の分から
んことをかなり興奮して熱弁してたから」
この彼の口調も、呆れていた。

それを聞いた奈津美とカオルは顔が真っ赤になつていた。

奈津美は恥ずかしさと旬への怒りからだつたが、カオルのは声に
出して思い切り笑いたいのを堪えてはいるためだ。

「オ、オッパイの神様……ふふつ……やつぱり奈津美の彼氏君、最高。お、面白すぎ……くつ」

カオルは必死に笑いを堪えて涙目になりながら奈津美を見る。

「カオル……」

奈津美は恨みがましくカオルのことを軽く睨んだ。

「う……じめんつて……」

カオルはそう謝るが相当ツボに入つたらしく、それも堪えよつとすることで逆にひどくなつてゐる。

「顔見てみたいな、その彼女」

「写メとか見たか？」

「いや、撮ろうとすると嫌がるからないつてさ」

拒否してよかつた……と、奈津美は心から思つた。実はこんなにすぐ隣にいるなんて、写メを見られていたらすぐバレていたかもしない。

「でもかなり美人で可愛いって。あいつ、本つ当ッテレッテレしながら彼女のこと話しててや、料理できるし掃除できるし洗濯できるし、あんなにいい彼女他にはいないって嬉しそうにノロけてた」

その言葉は、奈津美には純粹に嬉しかつた。顔は赤いまだつたけれど、それは恥ずかしいといつより、照れ臭い感じだ。

「へー。でも、匂と〇なんどどうこう繋がりあつたんだ？」

一人のそんな疑問に、奈津美のちょっとといい気分は吹つ飛ぶ。

旬！ まさかあのことまで友達に言つてないでしょうねー？

もし言つていたら、本当に別れてやると、少し本氣で考えた。

「それは聞いたけど言わなかつたな。『んなの勿体なくて言えるかよ～』ってキモいぐらいに『デレデレしてたから、聞く氣失せた』

ホツと奈津美は胸を撫で下ろす。

よかつた……言わなかつた理由は意味分かんないけど。

「……何だそれ。つうか旬のヤツ、あんなののくせに何でそんなにモテるんだよ。しかも皆いい女だし」

……モテるんだ。しかも皆いい女……

繰り返すように奈津美は心の中で言つ。

まあ、旬はどちらかと言えば可愛い系の整つた顔で、黙つてればいい男の部類だ。本当、口を開かず黙つて立つていれば。

「その彼女も何がよくて付き合つてんだらうな」

それは聞かないでほしい。（別に聞かれてはいないが）奈津美にもよく分からぬのだから。

「そうだよな。浪人生に魅力なんて感じるか？」

普通は感じないよね……つて、浪人生？

「旬のヤツ、浪人じやないぞ。大学全部落ちて、専門（学校）行くつもりだつたけど、それもやめたんだと」

「そりなのか？　聞いてねー」

「で、今何してんの」

「まだ仕事決まってないからとりあえずバイト生活だつて」

「ふーん。……あいつ、働くとかできるのかよ」

友人にも心配されている。奈津美も心から不安だ。旬は、ちゃんと就職できるのか……

「つうか、あいつ働く気ないんじゃねえの？」

その言葉に反応して、奈津美は見えないと分かっているのに、顔ごと隣を向く。

「彼女が○しつことはそれなりに稼いでるんだろ？　しかも料理も掃除も洗濯もできるつことは身の回りのことは全部してくれるわけで、最悪何もしなくても食つていけるじゃん」

「あー。確かに。まさかあいつそれで付き合つてんのか？」

「だとしたら最悪だな」

三人とも冗談っぽく軽い言い方で、笑い飛ばしていた。

そのあとの三人の会話は、奈津美には聞こえていなかつた。

「　奈津美」

「えつ……」

カオルに声をかけられ、奈津美は我に返つた。

「顔、死んでる」

「え……」

箸で奈津美のことを指され、奈津美は半ば無意識に頬に手をあてた。

「気にしちゃダメよ。本気で言つてることじゃないんだし、まして
本当のことじやないんだから」

カオルが、はつきりと奈津美に言い聞かせるように言つた。

「……うん」

奈津美は、小さく頷いた。

6 疑問と不安

奈津美は、帰り道、一人悶々としていた。

あんな話を聞いたら、嫌でも考えてしまつ。

自分は、旬にとつてただ都合のいい女なのだらうか。

カオルにああ言われたし、奈津美だつてそう思つ。……思いたい。だけど、あの話はやけに説得力があつて、そんなことない、と否定しきれない。

そう思つと、最悪だ……と、自己嫌悪に陥る。

他の人間の話を聞いただけで、自分の彼氏をそういう風に思つなんて……

旬がそんな風に思つてゐるはずないじゃないか。

旬は、素直な性格だし、嘘をついたらすぐ分かる。というより、元から嘘を吐いたりなんてしない。そういう人間が、他人をいいようを使うなんてこと、できるはずがない。

大体、旬は甘えてばかりといつわけではない。相変わらずデートの時に割勘を嫌がつて払いたがつてゐるし、別に何もせずに食わせて貰おうという意識はないはずだ。……未だに奢れるほどの懐は持ち合わせていないが、それはこの際どうでもいい。

何だか、そう考へるとだんだんポジティブになつてきた。

そうだ。それに、旬は奈津美のことを嬉しそうに話してたと言つ

ていたではないか。……主にスタイルを。

旬は女性の胸が好きらしい。いつも抱きついてくる時は胸を触るし、一人きりの時は『ナツのオッパイ』と嬉しそうに言いながら顔を埋めている。

いつだつたかは、ある童謡の替え歌で変な歌を作っていた。

ナツのオッパイいいオッパイ・すごいぞ・すごいぞ
巨だいマシユマロでできている・でかいぞ・でかいぞ

……カオルなんかが聞いたら爆笑だったんじゃないだろうか。さすがに言えないで分からぬが。

とりあえずこれも一応誉め言葉として取れば、嬉しい（？）わけだし、胸は旬の好み通りといつて、喜ばしい限りじゃないか。

「はあ……」

奈津美は思わずため息をついた。

何だか、無理矢理旬のいい所を探してゐみたいだ。勿論、全部本当にいいところなのだが、必ず粗も一緒についてくる。

考えすぎて、何が何だか分からなくなってきた。不安になつてくる。

自分にとつての旬はなんなのだろうか。旬にとつての自分はなんのだろうか。

自分の気持ちに自信がなくなつてくる。自分の気持ちが分からな

い。

奈津美は匂じやないとだめなのか……匂は奈津美じやないとだめなのか……もしかしたら、代わりなんていぐらでもいるのではないか……どこからともなくそんな考えも出でてしまひ。

そう考へると、とても寂しくなつた。

奈津美は自宅の「一ポの階段を重い足取りで上り、三階まで辿り着く。部屋へ向かいながら鍵を出そうと鞄の中を漁つた。

鞄の中に入れた手が、携帯に触れる。

そういえば、今日は友達と買い物に行くから帰つてきてからいつから電話する、と匂にメールを送つたのだった。

よりもよつてこんな時に、電話すると言つてしまつた。こんな気分で、匂と電話したら、声に出てしまつよつた気がする。メールすると送つておけばよかつた。と、奈津美は後悔した。

更に悶々としながら鍵を探り出し、奈津美は自分の部屋のドアを開けた。中に入り、鍵とチヨーンをかけてしつかりと戸締まりをしてから中に入る。

何も考えずとも毎日の習慣で、奈津美は部屋に入るとまずエアコンをつけてから「一ポ」を脱ぐ。

いつもはそれからテレビをつけたり、化粧を落としたりするのだが、今日は鞄から携帯を取り出すと、そのままベッドに寝転んで携

帯を開いた。

操作をし、リダイアルを表示する。基本的にかけるより受ける方が多い奈津美だが、それでも一番上有る番号は旬だ。

そのまま、発信ボタンを押せば、旬に繋がる。それが躊躇われた。

旬は待っているかもしれない。いつもメールも電話も、よこすのはほとんど旬の方だから……

そう思つたらするしかない。

大丈夫。旬の声を聞いたら、きっといつも通りにできる。

奈津美は意を決して通話ボタンを押し、耳にあてた。

プルル

「もしもし、ナツ？」

早い。呼び出し音が一回鳴る前に旬は電話に出た。奈津美が電話すると、いつもこれぐらいの早さで出る。これに少しほっとした。

「うん。……相変わらず出るの早いわね。今何してたの？」

いつも通りの話し方、いつも通りの声の調子。それを心がけて奈津美は話す。

「ナツの電話待つてた」

嬉しそうな声が返ってきた。それは、その言葉が本当だという証明になつてゐる。

「そう……」

電話してよかつたと思った。やつぱり、声を聞いたり安心できる。声だけで、さつきまでの重い気持ちが軽くなつた。

「ナツ? 何かあつた?」

旬は急にこいつらを伺つようこいつらに話つた。

「え……何で?」

内心じきりとしながら、奈津美はそれが出ないように努めて聞き返した。

「んー……何か声が元気ない。いつもと違つ。『氣のせい』?」

氣のせいじゃない。旬は、たつたこれだけのやりとりで奈津美の異変に気付いたらしい。

何でこいつらにこばかりは鋭く感知できるのだろう。

「つうん。何もないよ。ちょっと友達と飲みすぎたからかな」
そう言つて、誤魔化した。

「えつ……ナツ飲んだの? 大丈夫?」

今度は心配するような口調だ。

「どうして?」

「だつてナツ、酔つたら荒れるじやん」

旬が言つてるのは、明らかに一年前のことだ。

「なつ……荒れないわよー。あの時は特別だつたのー。」

奈津美は、ムキになつて声をあげる。自然と、いつもと同じ調子になつた。

「へへつ。そつか」

へラへラと笑う顔が頭に浮かぶ。しまりがなによつた顔だけど、奈津美は旬のその顔は嫌いではない。

「……ねえ、旬。……旬は、何であたしなんかと付きてるの?..」思わず、そんな言葉が出てきた。

自分で言つて、気持ち悪い。こいつとは『あたしのこと好き?』とか『あたしのどこが好き?』のような、聞かれるとうやつた質問と同じ類で好きじゃない。なのに聞いてしまった。それだけ今の気持ちに余裕がなくなつてしまつたのだろうか……

「何でつて……そこにはナツがいるから?..」

「.....」

何か聞いたことのあるフレーズのよつになつて返つてきて、奈津美はそれに対する言葉を失う。

「何か違う?..」

「うん」

何かといふか、全く違う。

「え?.....つうか、何でいきなり?..」

旬に痛いところを突かれてしまつた。

「別に……今思つたから、何となく……だつて普通引くでしょ? 払いの女とか。ていうか、旬がホテルに誘つたのつて下心? 酔

自分でも珍しいほどに奈津美は早口で口数多く喋っていた。焦るところなるんだ、と、自分で初めて知った。

「ん……まあ、ぶつちやけ？」

素直にあつむつと旬は肯定した。

「だつて、目の前でオッパイのおつきこお姉さんが『帰りたくない』つていうもんだからさ？ それでちよつと、まあ……『うん』」
流石にちよつとばつが悪そうに、旬は言つてこる。

それは、確かにあの時は奈津美の方がそうなつてもじょうがない状況を作つたのだから仕方ない。

「でもさ、俺、それがナツでよかつたと思つてんだ」

「え……」

旬のその言葉の意味が分からず、奈津美は返す言葉に迷う。

「ナツのこと、知れば知るほど好きになるから。」
「うう、ナツが初めてなんだ」

旬はそう続けた。

「……そんな恥ずかしいこと言わないで」

本当は嬉しいのに、顔だつて赤くなつているのに、旬のよつに素直な言葉にすることができない。奈津美は、何だか少しクールな口調になつてしまつ。

「うん。自分で言つてちよつと恥ずかつた」
そう言って旬は笑つた。

匂に会いたい。
急激にやつと思つた。

「ねえ、匂。十四日のことだな？」

「うん、何？」

「……匂がうちに来るなら、泊まりでもこよ」

いたなことを奈津美から聞いたのは、今分初めてで、恥ずかしく感じた。でも、たまには聞いてみてもいいだら。

「え……いいの？ 平田だからダメって聞いたのに」

匂は驚いた口調だつた。

それもやつだら。元々は匂が泊まりがいいと聞いていたのだ。『せつかくのバレンタインなのにー』といねる匂を『平田だからダメー』の一矢張りで押し伏せたのは奈津美の方だ。

「うん……でもやっぱりバレンタインだから、特別ね。それに、ケーキ作るの時間かかるし、匂がうちに来るんだつたらやつくりめに作れるし……あと、朝もいつも通りにできるから」

照れ臭くなつて言い訳じみたことを付け足してしまつた。しかも自分の都合に合わせたといつよつな、可愛くない言い方だ。

「別に匂が嫌ならいいけど？」

可愛くない言い方が続く。何でこんな高圧的なのだら。全くそういうできる立場じゃないのに……

「行く！ 絶対行く！」

それでも旬は、予想通りの反応を見せる。

それに安心して、奈津美は微笑んでいた。

7 アンバランス

本日、一月十四日。バレンタインデー。

午後五時。定時に仕事を終えた奈津美は、ロッカールームで制服から私服に着替えていた。いつもよりもときぱきと身仕度を整えている。

「奈津美、今日は早いわねえ」

カオルはいつも通りのペースで着替えている。

「ケーキ作らないといけないから」

奈津美はそう言いながら着替えを終える。そして皺にならないよう制服をきっちりとハンガーにかける。

「ああ。それに今日はお泊まりだもんねー」
カオルがからかい顔で奈津美を見る。

「べつ別にそれは関係ないから!」

ほんの少し頬を赤くして奈津美は言い返す。

「でもどう風の吹き回し? お泊まりのしたのって

「……まあ、イベントの時ぐらいはいいかなって思ったの

『何となく、会いたくなつたから』なんていくら友達でも、といふか友達だからこそ恥ずかしくて言えない。

「へ～。まあ普通はやつぱりそういうもんよね。いいなあ……やつぱりあたしも今日会いたかったなあ」

「でも週末会うんでしょ？」

「うん……でもやつぱり世間がバレンタインムードの中で一緒に居たいじゃない。まあ、ワガママは言えないけど」

「確かにねえ……あつ、じゃああたし帰るねー」

奈津美は時計を見て、急いでロッカーを閉めて鍵をかける。

「じゃあね。お疲れ様！」

「お疲れー。よい一夜を」

そんなカオルの声を背中に受け、奈津美は早足でロッカールームを出た。

奈津美は家に帰つて、大急ぎでケーキ作りを始めた。

この前はとつさに思い付いた言い訳でケーキをゆっくりめに作れるからと言つたが、本当ににそつしてよかつたと思う。夕方、帰つて来てからしか作る時間がないので、もし会つて渡すだけなら昨日のうちに作つて、今日、ラッピングしてまた出掛けるという面倒臭いことになつてしまつていた。

……そう考へてしまつと、やつぱり自分勝手な理由だらうか。旬の家でなく奈津美の家にしたのは、自分の家なら泊まりにしてもあ

まり疲れないからだし、バレンタインに旬の部屋の掃除といつのも
ムードがないと思ったからだ。

まあ、旬だから泊まりなりびつちの家でもあまり気にしていない
だらう。そう思つていいことじた。

一時間半ほどでケーキはできあがつた。チョコレートの生クリー
ムで「コレーションも完璧だ。

時計を見ると、六時半前だつた。
旬は今日、夕方にバイトが入つてゐるので、そこから直接来る。
六時以上がるから、六時半頃には来ると言つていた。
もうすぐ来るだらうと思い、奈津美は先に夕食の支度を始めた。

それからまた一時間。旬はまだ来ない。
夕食の準備は、とつとてできてしまった。

遅い。いくらなんでも遅すぎる。携帯を見てみても、メールも何
も来ていない。

バイトが長引いてるんだらうか。だとしても遅すぎではないだろ
うか。

旬が連絡もなしにこんなに遅れるなんて珍しい。いつも約束の時
間よりもやたら早い」とはあっても、遅れることなんてめつたにな
い。

奈津美は出るか分からぬが一応匂に電話をかけてみる。

「おかげになつた電話は、電波の届かない所にあるか」

受話器の向こうで聞こえたのは、そのアナウンスだった。

奈津美は少し心配になつてきました。

確か、夕方のバイトはカフェだと言つていた。そこは今から歩いて十五分ぐらいの所……

行つてみようか。奈津美は思い立つて、すぐにドアを手に取つて部屋を出た。

と、思わず出てきてしまつて、ちょっとこの行動はやりすぎだろうかと、奈津美は思つた。でも、連絡が取れないわけだし、バイト先かそこから来るまでに何かあつたのかも知れない。

それで迎えに行くのは自然なことだ。……と思つ。

一応、奈津美はメールを送つておくことにした。

『まだバイト？何かあつた？

今から迎えに行くからね』

さつき電話して繋がらなかつたけれど、念のためだ。

何か理由があつて連絡できなかつたのならしじょうがない。ただ、何もないなら早く安心したかった。

もしかしたら、途中で旬に会つかもしれないと思つたが会つ」ともなく、奈津美は旬のバイト先のカフェの前まで来てしまつた。道中も別に何かあつたという様子もなかつた。

ふと見てみると、店の看板の入り口に

本日バレンタイン割引
カップルのお客様・一人で200円引きです

という看板があつた。中を覗いてみると、カップルの客がたくさんだつた。

この店は、地元ではケーキが評判で若者の客が多い。そんな店がこんな割引セールをやつているのなら、客も普段よりも多くなるだろう。

それで遅くなつたのかな?と奈津美は考える。それなら多田に見てやるうと思いながら、奈津美は店の中に旬の姿を探してみた。しかし、忙しく動いている店員の中には、旬の姿はない。

丁度上がつたところのだろうか。

奈津美は、もう一度電話してみようかと、ホールのポケットの中の携帯を取り出した。

その時だつた。

店の脇道から、見覚えのある姿が出てきた。

旬だ。きっと従業員用出入口から出てきたのだろう。

「しゅ……」

奈津美は、呼ぼうとして途中で固まつた。

旬はその場に立ち止まつて後ろに振り返つた。そして、旬が出てきた所から、旬を追い掛けるようにして誰かが出てきた。可愛らしい風貌の女の子だった。

二人は、仲良さげに話し始めた。

誰……？

旬と同い年ぐらいで、背も小さくて、明るめの茶色にパーマをかけた髪型がよく似合つてゐる。そして何より、小さな体と対照的に胸が大きい。

多分、同じバイトの娘だろう。

それは何となく感じたのだが、奈津美には、彼女と話す旬は、とても楽しそうに見えた。旬は人見知りをしないし、誰とでも基本的にあんな風であるのに、奈津美にはそれが変に不愉快に感じた。

なのに声も掛けられず、奈津美はただ一人を見ていた。

女の子の方が鞄から、ラッピングされた小さい袋を取り出し、旬に差し出した。明らかに、バレンタインのチョコレートか何かだ。旬はそれを笑顔で受け取つた。

貰うんだ……

奈津美は田の前の光景をただ呆然と見つめていた。

最後に、二人は一言一言交わし、手を振つて別れた。女の子の方は、奈津美がいる方の反対側へと消えていく。

そしてすぐに、旬の視線が奈津美の方へと向き、田が呟つ。

「あ！ ナツ！」

旬は、ぱあっと表情を明るくして奈津美のもとへ走ってきた。

「ナツ！ 何でここにいるの？ もしかして迎えに来てくれた？」

「……うん」

奈津美は無表情で頷いた。

『何でここにいるの？』

メールを送つたはずなのに、そう聞かれてしまった。

「あ、『めんな？ 今日、夜からの奴がインフルエンザで急に来れなくなつたらしくてさ、バイトの時間延びたんだ』

旬が申し訳なさそうに言つ。だから奈津美も、

「そりなんだ」

としか言えなかつた。

「でも嬉しー。ナツがわざわざ迎えに来てくれるなんてさ」緩みつぱなしの表情で、旬が言つた。それにつられて奈津美の表情も緩むが、それでも心の中の変に残つたもやもや感はなくなつてない。

「んじゃ帰る」

旬が奈津美に手を伸ばした。

ほんの一瞬躊躇つてしまつたが、気付かれなによつて奈津美は旬の手を取つた。

「今日バレンタイン割引つてやつしてさあ」

歩きながら、旬はいつものように話し始める。

「うん。書いてあつたね。200円引きだつける奈津美はできるだけ普通を装つて相槌を打つた。

「そつ。だからこつも以上に人居てすつげー忙しかつたんだ。しかも皆カツプルだし。……あーあ。せつかくのバレンタインなのにとんだ災難だよ」

「……しあうがないでしょ。そついう仕事なんだから」

奈津美はそれもいつも通りに言つたつもりだつた。

「……ナツ、何かあつた？」

旬が奈津美の方を見て、いきなり言つた。

「え……」

「」の間電話した時も思つたけど……やつぱり「元気ないっぽいし

旬はやつぱり鋭い。

でも、こんな奈津美自身いまいちよく分からぬ変な気持ちを、旬には言えなかつた。

「そんなことないわよ。確かにちよつと仕事の疲れが溜つてるかも
しれないけど、別に大したことないから」

無理矢理言い訳を作つて、奈津美はわざと弱るい声を出して言つた。

でも、旬の目を見ることはできなかつた。

「仕事をつける？」

旬は労るよ^ううな、心配するよ^ううな口調で尋ねる。
その言葉に、奈津美の心が染みた。

「大丈夫。やらないといけない」ともひやんと片付いたし、あとはいつも通りだから

旬に心配をかける嘘にそれを解消するための嘘を重ねた。なんて最低なことをしてゐるのかと、自分で自分が嫌になつた。

思つてこることを、気になつてこることを、それとなくでも言えれば楽になるだらうか……

「そつといえは……旬。携帯、電源切つてたの？」

連絡が取れなかつたことを聞こいつと思つて、奈津美はそのことには話題を変えた。

「あつうん。そうだ、俺充電切れかけだつたから切つてたんだ。あ、もしかしてナツ、電話くれてた？」

「……うん。メールもしたんだけど」

「マジで!? 『ごめん、まだ見てなかつた』

旬はそう言つてダウンジャケットのポケットから携帯を取り出す。

奈津美は、段々とイライライってきた。

「……普通、それが先じゃない?」

必死に感情は抑えて、奈津美は匂に言つた。

「え……?」

匂はきょとんとして奈津美を見る。

「女の子と話す暇はあっても、あたしに連絡しようとは思わなかつたの?」

「言つまこと心がけた一番言いたくなかったことが口から出てしまつた。

「女の子……あ、見てた? あれ、同じバイトの子だよ。一緒に

とばつちつ受けたんだ」「

匂は事も無げにそう言つた。

そんなこと、大体分かつてゐる。でも、匂の口からあつさりと、奈津美以外の女と『一緒に』という言葉が出てきたことが、ショックだつた。こんなちやちなことにまで反応してしまつ。

「ああいう子、匂の好きそうなタイプよね」

胸のあたりなんか特に、と心の中で付け加えて奈津美は皮肉のつもりで言つた。

「えー? まあ、顔は可愛いとは思ひやしないつて

匂はそれに気付かず、こつものように戻していく。

「でも、バレンタインの……チョコが何か貰つてたじやない？」

「貰つたけど……でもあれは義理だから貰つただけだよ。彼氏に作つたクッキーが余つたからつて。皆さん配つてるし、あんまり形もよくないやつだけどつて言つてたから貰つたんだ」
少しも悪いとも思つていないうつた口調だった。

実際、嘘をついているわけでもないのだし、匂に悪いことこりなんてない。

なのに、奈津美のイライラした気持ちば、じんじんひびくなつていぐ。

「あ、もしかしてナツ、ヤキモチ？」

奈津美の心境に気付くわけもなく、匂は一ヶと笑つて言つた。

「……別にそんなんじゃないから

いつもより、声が低く重くなる。これだとともどもとない可愛げが、本当にくなつている。

「ナツ、心配しなくても俺にはナツだけだつて。ナツが居れば、俺は生きていけるから」

匂はいつものように笑つてそう言つた。

いつもなら、それで奈津美も赤くなりながら『何言つてんの』と言えるはずだった。なのに、今は、そんな風にできなかつた。

苛立ちだけが、募つていぐ。

奈津美は、黙つて立ち止まつた。

「ナツ？」

半歩ほど前に出た匂が、奈津美の方に振り返った。

「何へ？ へ？」

また声のトーンが下がっている。明らかにいつもの様子じゃない。
匂も奈津美の異変に気付いたが、それでも理由が分からずただ呆然としている。

「少しは悪いとか……申し訳なさそうな態度はとれないの？」

語調も声も、荒くなっている。こんなひどい自分は初めてだった。

「あたし……不安だつたんだから。匂が……いつも時間通りになのに連絡もなく一時間以上も遅れて……電話しても繋がらないし……心配したんだから！」

こんな責めるような言い方はよくないとも、やめないといけないとも思つてゐる。でも止まらない。

「あたしが……そういうの思わないとも思つたの？匂が何時間遅れても、平氣な顔して、簡単に許すとでも思つてんの！？」

奈津美の荒げた声に、道行く人間が振り返つてまで一人を見る。そんな好奇の視線も、今の奈津美には気にならなかつた。

「そんなことないつー。『めんつー。俺、そこまで考えられなくて……でも連絡できなかつたのは、客が多かつたから時間なくて……終わつてから、ナツの家まで走りながら電話しようと思つたから……その前に呼び止められて……』

「もういい！」

匂が必死に言つてゐるのを、奈津美は無理矢理遮つた。

匂の言葉を、冷静になつて素直に聞けばよかつたのに、奈津美にはできなかつた。

「何が『ナツがいれば生きていい』よ。そつ言えれば機嫌とれるとでも思つてるの！？ どうせ匂はあたしが身の回りのことをやつてくれるから、あたしがいないとダメなんでしょう！？ そんなの別にあたしなんかじゃなくともいいじゃない！？」

「ナツ……違ひよ……」

「何であたしがこんな思いしないといけないの！？」

奈津美は、もつ匂の言葉を聞こうともできなかつた。ただただ、自分の感情を剥き出しにして、思つてもないことばかりが口から出てしまつ。

「匂の部屋の掃除も……料理も洗濯も、あたしがやつてくれて当た
り前つて思つてんの！？ あたしは匂の母親じゃないのよ。」

そこまで言い終わつた後、奈津美は肩で息をしていた。匂を見る
と、悲しげな目をして、まるで叱られた子供のような表情をして
た。

奈津美は、その顔を見たくなくて、うつむいた。

「ナツ……『めん。』『めんな……』

そう何度も匂は謝りの言葉を繰り返した。

匂は悪くないのに……悪いのは、自分なのに……

「もう嫌……これじゃあ、あたしづっかりが旬のこと好きなだけみたい……」

奈津美は、小さくそう呟いた。

「え……？」

奈津美は、旬の手を振り解いて走り出した。

「ナツ……！」

旬は大声で奈津美の名前を呼んだ。

それでも、奈津美は、振り返らずに、逃げるよひに走った。

「ナツ！ 待つて！」

後ろで旬の声が何度も聞こえた。

でも、奈津美は立ち止まりも振り返りもせずに人混みの隙間を縫つて、走り続けた。

「一ホの階段も駆け上がり、奈津美は部屋へ向かった。

下の方で、足音がする。旬がここまで追い掛けて来ている。

何で来るの……

そう思った。でもきっと、追い掛けて来なかつたら、確実に『何で来ないの！？』と、思っていただろう。

奈津美は、そんな自分勝手さに、更に嫌気がさした。

旬が来る前に、奈津美は急いで部屋の鍵を開けて中に入った。そしてすぐに鍵を閉めてチーンをかけた。

急に止まつたせいで汗が吹き出して、久々にこんなに走つたせい
で足がガクガクしている。奈津美はドアにもたれかかった。

「ナツ！」

ドアの向こうから声がして、同時にドアノブがガチャガチャと音を立てた。

奈津美はビケリと肩を震わせた。

「ナツ、ごめん……」
走ったせいか、匂も荒い呼吸でやう言つた。

「俺……ナツがそういう風に思つてたとか、全然考えてなくて……」
旬は、奈津美の言葉にも行動にも、一言も疑問や責めるような言葉を発しなかつた。

きっと、奈津美の言つた「」とを、そのまま受け取つたのだろう。

旬は素直だから……

「ねえナツ……開けて……入れてよ！」

匂の切なげな声が聞こえた。

「ソーラーでどうして毎のよひに素直になれないのだらう。」

「……帰つて」

奈津美の口からは、冷たい言葉しか出なかつた。

「ナツ……」

「帰つて。旬の顔……見たくない」

今、旬に会つたら、また責めてしまいそうで、そんな自分が嫌になつて、また責めて……悪循環に陥りそうだったから……

「帰つて……」

奈津美は絞り出すよつた声になつていた。

ドアの向いの旬は、じぱりく何も言わなかつた。

そして、そのまま何も言わず、ゆつくりとその場を離れる音が聞こえた。旬の足音が、遠ざかっていく……

旬の足音が聞こえなくなると、奈津美はその場にへたり込んだ。

「……ふつ……うつ……」

奈津美は涙を溢していた。

泣くのはいつぶりだらつか。奈津美は、嗚咽を漏らしながらただ泣いた。

自分が堪らなく嫌になつた。

結局は自分中心だ。

今日は、奈津美が会いたいから、わざわざ匂に来てもらひたはずなのに……安心したかっただけなのに……逆に不安になつて、匂に当たつて……何をしてるんだろう。

匂に言われた通り、ただ、あの女の子に妬いてしまつただけだ。それだけなのに、どうしてこうなつてしまつたのだろう。

匂に言つたことは、全部が全部、本音ではない。あそこまでひどくは思つてない。

……なのに、弁解もせずに逃げて、追い掛けで来てくれた匂も、追い返してしまつた。

もう無理なのかもしない……

もう思つて奈津美は更に泣いた。

「気持ち悪い……」

翌日、奈津美は胃のムカつきを抱えながらも出勤した。ロッカールームで着替えながら、何度も同じように呟いてくる。

「そりゃそりでしょ。ヤケ食いでケーキをホールで食べたんでしょう？」

奈津美から昨夜の話を全部聞いたカオルが、呆れたように言った。

「本つ当……朝来てビックリしたわ。別人かと思つた」

「じついつ意味……」

「だつて顔ヒドイし。顔むくみまくり、目腫れまくり、隅もできまくり。一晩で何があつたの？ つてぐらい顔違つわよ」

カオルの言葉に、奈津美は何も返せなかつた。

全部本当のことだ。

昨夜、旬が帰つてしまつて、一人で玄関で泣いた後……奈津美は、悲しいのと寂しいのと悔しいのと……たくさんの感情を『食』にぶつけた。

一人で食べるはずだつた夕食を、一人分全部食べ尽し、旬に渡す予定だつたチョコレートケーキも、ホールで丸ごとがつついた。しかも泣きながら……

そして食べたらそのまま寝てしまい、朝起きた時にはひどかった。目が開かないほど腫れてしまい、お姑さん状態。鏡で見てみるともつとひどく、顔もパンパンで、ぐつすりと疲れなかつたせいで目の下にはびつしりと隅ができていた。

カオルの言った通り自分でも本当に別人かと思つた。

しかも食べ過ぎで胃がもたれでいる。

こんな顔でこんな体調で、仕事に行きたくない。そう思つたが、そんな理由で休むわけにもいかない。奈津美は、熱いシャワーを浴びて、化粧をし、胃薬を飲んで、何とか出勤したのだ。

「あー……吐きそう」

「大丈夫？ ていうか、太るわよ」
カオルは、嫌なことを言つてくる。でも、現実だ。

昨夜はそんなことにせず、勢いで食べた。夜にあんなに食べて、しかもケーキを食べたら、恐ろしいことになる。

体重、体脂肪、贅肉、ニキビなどの吹出物が増える……最悪だ。
旬だったあればだけ食べても太らないし、肌だって綺麗だ。
何で旬はいつも平氣なの……

そう思つて、はつとする。……無意識に旬のことを考えていた。

最悪……

奈津美は深く溜め息をついてうなだれた。

「ねえ、大丈夫？ 本当、休んだ方がいいんじゃない？」
よっぽど気分が悪いと思つたらしく、カオルが奈津美の背中をさすつた。

「……大丈夫。ちょっと、ギリギリまでここにいるから……」
顔を上げず、奈津美はカオルにそう言つた。

「……分かった。じゃあ先に行つてるね」
奈津美を気遣つてそう言つと、カオルはそつとロッカールームを出て行つた。

一人になつて、奈津美は大きなため息をついた。

一体何をしているんだろう……

旬に勝手に腹を立てて、追い返したはずなのに、思わず旬のことを考えてしまつていて。きっと、癖になつているのだ。

奈津美は、鞄から携帯を取り出して開いた。不在着信が三件、メールが十件……全部旬からだ。でも、奈津美はかけ直すことも、メールを開くこともしなかつた。

携帯を閉じ、鞄に放り込み、奈津美は顔を上げた。

鏡を見ると今の自分の顔が映り込む。相変わらず、ひどい顔をしている。

朝に比べればましになつたものの、まだ腫れぼつた目、むくみ

もとれていな。目の下の隈は、ファンデーションとコンシーラーで必死に隠そしたが、今日は化粧のノリが悪いせいで隠し切れてない。

もう一度ため息をつくと、奈津美はロッカーを閉め、オフィスへ向かった。

「一回彼氏君と話した方がいいんじやない？」

昼休み、食堂でカオルに言われた。

奈津美は、まだ胃の具合が悪くサラダを食べていたが、カオルの言葉によつて更に食欲が失せた。

「彼氏君からメールとか来てるんじやないの？」

着信やメールのことは言つていなのに、カオルは鋭く言い当つた。奈津美は言葉に詰まる。

「奈津美の気持ちも分からなくはないけど……あたしもつい彼氏に当たる時あるし……そんな場面見たんなら尚更ね……でも、言い過ぎたつて思つんなら奈津美も悪いよ。わけも言わずに追い返されて……彼氏君、絶対困惑してるつて」

カオルの言つことは尤もだと、奈津美には分かつている。

むしろ『奈津美も悪い』ではなく『奈津美が悪い』といふことも

「……でも、匂に何ていったらいいか分かんないし……また当たつちやいそつだし」

奈津美は俯いて小さく呟ついた。

「……奈津美達って、もしかして喧嘩とか、言い争いとか……したことないの？」

カオルが驚いたような顔をする。

それを言われて、奈津美は考えてみる。

喧嘩……という喧嘩は、したことないのではないか。
パスタ屋の会計でもめたことはあるけれど、それはすぐに解決したし、あれ以上で険悪なことになつたことはない。

そもそも、だ。

「あたしつつて……匂の前までも、別れる時以外で彼氏と喧嘩したことないかも……」

「ウソ……？」

カオルは目を丸くした。

「……ていうか、喧嘩が原因で別れる、みたいな感じだつたかも……」

思い起こしてみれば、今までの別れのパターンは大体同じだ。

まず、何かで言い争いが始まる。それは些細なことだつたり、よくある浮氣をしたしてないの話だつたり、様々だつたが、言い争いになると、奈津美がつい素を曝け出し、罵詈雑言に近い言葉を浴びせる。そしてその後はこつだ。

『お前そんなこと言う奴だつたのか?』

『お前と付き合つたのが間違いだつたよー。』

『もうお前みたいな奴は無理……』

唖然、逆ギレ、ドン引き……リアクションは個々だつたが、そんな言葉と共に別れてきたのだ。

だから、奈津美には喧嘩して仲直りという感覚がよく分からない。

「奈津美……それなら尙更ちやんと話すべきだつて。喧嘩つて別れるためにするものじゃないんだから。用並みだけど、お互いを理解するためのものだと思つ。ていうか、ある方が普通よ」

「やうなの?」

カオルの言つこと、一々言つて、目から鱗、とこつ返分だつた。

「やうよ。一回もしたことないつて人達もいるにはいるだらうけど。でも、あたし達だつてするし。」

「やうなのー?」

奈津美は驚いて目を丸くする。カオルと彼氏は、順調に付き合つているイメージがあつて、喧嘩なんて一度もしたことないと思つていた。

「そりゃあるわよ。まあ、大抵は本当に下らないことだけど。『テー
トの前日にいきなり仕事入ったとか、向こうがストレスたまつてて
虫の居所が悪かったとか』

「えー……それで、そういう時はどうするの？」

奈津美は、興味津々という様子でカオルに尋ねる。

「どうって……奈津美、本当にひどい喧嘩の仕方しかしたことない
のね……」

カオルは、もう呆れたような表情になる。

「別に普通よ。言いたいこと言ひだけ。それから、相手の言いたい
こともちやんと聞く」

「それだけ？」

「それだけ」

きょとんとした様子の奈津美に、カオルははつきりと頷く。

「それって、素で？ 結構キツイ」とつたりする？」

「そりゃするわよ。だって、いくらなんでも一度も素も本音も出
さなかつたらストレス溜るでしょ。お互いに」

「…………」

確かに、今まで言いたいとを我慢していたが故に、言葉が酷く
なるという節はあるかもしねえ。

匂に向けてしまった言葉も、きつとそりだつた。

「でも、それは自分がただぶつけるだけじゃなくて、相手の言つて」

ともちゃんと受けとめて初めて成立するの。それで、自分の通したい所は通す、逆に相手の意見を尊重して妥協するところはする。……そんな感じよ」

まるで解説者のような力オルの言葉を、奈津美はただ黙つて聞いた。そして力オルは、更に続ける。

「男女だからっていう前に、そういうのって人間関係として必要なものじゃない？ 単純に、人と付き合つんだから、他人に受け入れてもらうことも他人を受け入れることも」

なるほど、と奈津美は思つ。とても説得力がある。

「……でも、どうしても受け入れられて、受け入れてもらえないって場合もあるだろ？ ……その時は本当に合わないってことでしょう。だから奈津美」

力オルの視線がいきなり奈津美に向き、何となくぎくしとした。

「彼氏君とちゃんと話して、彼氏君が奈津美にとつてそういう相手なのか、ちゃんと見極めてみたら？ もしそれで別れることになるんなら、彼はそれまでの相手だつたってことでしょう」

本当に、力オルの言つことには説得力がある。

今までの彼氏がいい例だ。些細な言い争いから、お互の本心を知り、相手はその奈津美を受け入れてくれなかつたわけで、奈津美もまた、相手を受け入れようとしていなかつた。

要はそれが『そこまでの関係』だつたということだ。奈津美と旬も、そうなつてしまふのだろうか……それは誰にも分からぬ。

その次の日も、匂から着信とメールが何件も入っていた。しかし、奈津美は相変わらず、電話に出ることも、かけ直すことも、メールを開くこともしなかった。

そして、匂と連絡をとらないまま、その翌日。

奈津美はもう携帯の電源を切つて一日を過ごした。電源を入れていたら、いちいち気にしてしまいそうだから……

この日の夕食は、前から約束していたカオルとの外食だった。雑誌に載っていた、和食の創作料理の店だ。

二人はいつも通り、何気ない会話をしていた。

「そう言えば、奈津美」

笑っていたカオルが、ふと真顔になる。

「彼氏君とちゃんと話したの？」

奈津美の箸がピタッと止まる。カオルには、あれ以降そのことについて何も言つてない。

「……話していない。ていうか、メールも電話も無視してるし」

奈津美はカオルの方は見ず、そう言つた。誤魔化すように箸を動かし、料理を口に運んだ。

「え……」

今度はカオルの方の箸が止まつた。

「話してないの！？ 何で！？」

カオルは身を乗り出すほど勢いで聞いてくる。

奈津美は何も言わず料理を食べる。

「ちょっと、奈津美！」

カオルの厳しい声を聞き、奈津美は箸を止める。

「……分からぬの」

小さなため息混じりに奈津美は呟いた。

「分からぬって……何が？」

「旬に、何を言いたいのか……分からぬ」

奈津美の言葉に、カオルは黙つて眉をひそめた。

「例えば、三日前のこと」を謝るにしても……どう謝ればいいのか分
からない

「何で……どういづ」と？

「……色々考えたら、あの時出でてきたのは、本音だったのかもつて
だつて、普通思つてもないことなんて口から出でくるはずないじや
ない？だから、自分でも気付かぬうちに、旬に対してもああ思つ
てたのかなつて……」

奈津美の口許には、苦笑混じりの笑みが浮かぶ。

「だいたいさ、旬だつて流石に嫌気さしたと思つんだよね。勝手にキレて、いつも以上にあんな口汚くなつて、言つだけ言つて後は無視。あたしだつたら、こんな女嫌だもん。」そのまま付き合つても、お互いつストレス溜りそうだし……そろそろ別れ時かなーつて、軽く笑い飛ばして、奈津美は言つた。しかしそれは、単なる空気のように虚しく聞こえる。

「いいの？」

カオルは、静かに口を開いた。

「奈津美は、本当にそれでいいの？」

あまりの真剣さに……いや、多分それは関係なく、奈津美は固まつてしまつた。自分でも何故か分からぬ。

大きなことを言つておきながら、いざ面と向かつて確認されたら、口が動かなかつた。『うん』と頷くことだけもできなかつた。

見兼ねたカオルは小さくため息をついた。

「あたしは奈津美と彼氏君は、すぐにお似合いなんだと思つてた。奈津美、いつも何だかんだ文句言しながら楽しそうだもん。彼氏君の話してる時」

「え？」

カオルのいふことの意図が掴めず、奈津美は更に言葉を引っ込む。

「それに、奈津美の話の彼氏君も、奈津美のことがとにかく好きなんだなあつて……あたしはそう思つたけど?」

「ウソ……どこが？」

奈津美は、少し驚いた。今まで、カオルに話したことは、匂の愚痴というか、どちらかと言えば陰口っぽい（そこまでひどくはないが）。それなのに匂の気持ちが分かる要素があつたといつのか……

「奈津美が楽しそうだから。奈津美、前の彼氏と付き合つてた時はそんなに楽しそうに話してたことないし」

カオルは、簡潔に同じことを言つて応え、更に続けた。

「だから、奈津美はよっぽど彼氏君のことが好きで、彼氏君は奈津美をそういうふうにさせるぐらいに、奈津美のことが好きなんだつて、あたしは思つてた」

カオルは、お茶を一口飲み、また更に続ける。

「別に奈津美はそういうじゃないなら、それで別れるつて言つんなら、あたしは何も言えないけど……当人同士のことだし。でもやつぱりちゃんと話してから別れなよ？ 自然消滅とか、後々面倒なんだから」

最後の方は説得するような口調だった。

「……うん」

奈津美はやつと声を出し、頷くことができた。

カオルと別れて、奈津美はトボトボと帰路についていた。

じつくつと、考えてみる。匂と、奈津美自身のことを……

別れて後悔しないのか……と聞かれたら、正直どうか分からぬ。ただはつきり言えるのは、後悔しないとは言いきれないこと。

こんなこと、考えるのは初めてだ。旬と別れるなんて、考えたことなんてなかつたのかもしれない。

『俺のこと振るなよな』
『俺、ナツを振るなんてバカなこと絶対しないよ。だから、ナツも俺のこと振るなよな』

ふと、その言葉を思い出す。旬が口癖のよつよつことだ。それを聞くと奈津美は、『分かってる』と軽く曖昧に返事をしていた。

その言葉を信じてないところだけではないが、当てこむしていいというか、真に受けはいなかつた。

こんな会話は、付き合えば定番のものだと思つてゐるのだ。

付き合つてゐる時の絶頂期に、必ずと言えるほど男からそんなことを言つて來たからだ。

『俺たちは絶対別れることなんてないよ』
『俺には奈津美しかいないから』
『俺のことは信じてくれて大丈夫』

男達は簡単に永遠を約束するような言葉を口にして、そのくせ別れる時はそんなことを忘れたかのように別れの言葉を囁く。また、下手したら浮氣をする。それが奈津美の今までの経験からの見解だ。

そして、それを真に受けてしまつて、別れた時に後悔する。別れ方によれば悲しさが倍増する。もしくは、『何であんな男の言つことを信じたのよ…？ あたしのバカ！』と、腸が煮え繰り返りそうなほどの苛立ちに見舞われる。（奈津美は比較的後者の方が多い）だから、奈津美は、こうこう話題になつた時は、適当にやり過ごす。

それに、好き同士付き合つていれば、お互にそんなことを思つのは、当たり前だと思つ。それをわざわざ口に出して確認するよりなことは、奈津美は好きじゃない。

奈津美としては、そんな言葉がなくても、信用できる態度といつが、ちゃんとした気持ちが分かれば十分だ。

……句は……そう考へると句は、口にしてもしなくても、そういうのは伝わる。むしろ、こつでもどこども、露骨なぐらごに態度にも言葉にも……全体で奈津美に対する気持ちを表している。

あんな奴と、初めて付き合つた。あんなに、バカみたいに素直な男……

句は……一度でも、ほんの一瞬でも、何でこんな女と付き合つてるんだら？ とか、思つたことはないんだら？ とか……

そんな様子は、奈津美の知る限り一度も見たことがない。奈津美が気づいていないだけなのか、もしくは、本当に一度も思つたこと

がないのか……

流石に、今回の「」とで、少しは思つただろう。

奈津美は、携帯を取り出した。

今日ははずつと落としていた電源を、やつとこれる。

操作をし、受信ボックスを開いた。旬からの未読のメールが……
数えてみると二十件になっていた。

奈津美は、それを古いものから、順番に開いていく。

まず最初は、一月十四日十七時五十八分。奈津美が旬を追い返した後だ。

『今日は本当に「」めん！
俺、ナツのことをちゃんと考えてなかつた。ナツが怒るの当たり前だよな。
本当に「」めん！』

とにかく謝つていいやつだ。あの場の流れでは、とりあえずそつするしか思い浮かばなかつたのだろう。

そして、次が深夜一時過ぎ。

『ナツ

ちゃんと謝るから、電話したい。いつでもいいから、電話下さい』

奈津美は次々とメールを開いていった。

『ナツ

メールだけでいいから、返事欲しい。
いつでもいいから。俺待ってるよ』

『ナツ。本当に『ごめん。

許してくれなくてもいいから、話したい』

その後も似たようなメールの内容だった。

『ごめん』

『ちゃんと謝りたい』

『話したい』

『連絡ほしい』

そんな内容が繰り返されていた。

奈津美に対して、責めたり怒ったり、そんな言葉は一切使わずに

……

あんなに自分勝手なことばかりして、ひどいことをしたという
のに……

『そうだ……』

旬は、そんなこと言つたり、ひどいことをしない。

そんなこと、分かつてたはずなのに……

『流石に嫌気をしたと思つんだよね』

どうしてあんな風に言えたんだね。

奈津美は、ゆっくりと携帯を操作し、メールの問い合わせをする。電波状況が悪いせいで『接続中』という文字が長い時間点滅している。

もしも、旬と別れたら……

奈津美はそれを想像してみる。

もしも、旬と別れたら、もう旬とは、連絡をとるとはないだろう。それは分かる。

このままの別れ方だと、別れてからも友達としてなんて、付き合える自信がない。

旬からの電話もメールも、もつなくなると考えたら……例えば今

の、問い合わせているメールが、旬から一通もきていなかつたら……

奈津美の頭が真っ白になる。足も、無意識に止まった。

嫌だ

この時奈津美は初めて気付いた。自分の中の、旬の割合の大きさに

バイブがなつた。

メールが来ていることを知らせている。

受信メールは四件……

奈津美は受信ボックスを開いた。

沖田旬の名前が4つ、並んでいた。それを見て、奈津美は、泣き出しそうなぐらいに安心した。

そして、それを順番に開いていった。

今日の一件目は朝九時過ぎ。内容は、昨日までと同じような、『めん、というもの……』

一件目を、開いて、奈津美は目を見張った。今までと少し違い、今まで一番短かつた。

『ナツに会いたいよ』

たつたそれだけの一文……

たつたそれだけでも、旬が伝えたいことは充分に分かるものだつた。

奈津美は本当に泣きそうになるのを必死に堪えて、次のメールを開いた。

次のメールは、午後五時半過ぎ……一度、奈津美が遅めに仕事を終えていた頃だ。

『今からナツの家に行くよ

奈津美は目を丸くして今の時間を見た。午後九時四十七分……もう四時間以上経っている。

どうしよう……

何でこんな時に、電源を切つてしまつていたのだろう……

奈津美は今更になつて後悔した。

そして、あと一件……七時前に来ていたメールを開くと

奈津美は携帯を握りしめ、走り出した。

『 もしそれで別れることになるんなら、彼はそれまでの相手だつたつてことでしょ』

走っている奈津美の頭の中に、カオルの言葉が響いた。

怖かったんだ。それを思い知るのが……

もし、旬と話しても、別れことになつたら、奈津美にとつて旬は『それまでの相手』だということ……

それを、知りたくないくて、奈津美は匂を避けてしまった。
そんなことをしたからといって、状況がよくなるというわけでも
ないというのは、分かっていたはずなのに……

匂からのメールは、またシンプルな一文だった。

『俺、ナツが帰ってくるまでずっと待ってるよ』

奈津美の今の気持ちは、きっと匂と同じ……同じだと、奈津美は
信じている。

匂……、めんね。

匂に、会いたい……

10 素直な気持ち（前書き）

これでも削ったのですが……長いです（苦笑）

奈津美は「一ポの階段を一気に駆け上がり、呼吸を乱していた。立ち止まって、息を整える。そこに風が吹いて、うつすらと汗をかいた体を冷やした。

今日は寒い……

天気予報では確か、この冬一番の冷え込みと言っていた気がする。ぞくりと奈津美の背中に寒気が走った。

「……ふえつぶしつ……」

誰かの激しいくしゃみが聞こえて、奈津美は肩を震わせた。誰もいないと思っていたので驚いた。

しかし、今のくしゃみは何となく聞き覚えがある気がする。

「ふえつぶしつ……」

……また聞こえた。

もしかして……

奈津美は、自分の部屋の方へ小走りで向かった。

部屋の前は、電灯が点いているとはいえ薄暗い。しかし、奈津美の田にははつきりと映った。

奈津美の部屋のドアの前にしゃがみ込み、寒そうに体を丸く縮こめている、旬の姿を……

「……旬」

奈津美は、その名前を呼んだ。自分が思つたよりも小さく細い声になってしまった。

それでも、旬はすぐに反応して奈津美の方に向いた。

「ナツ！」

奈津美の顔を見ると、立ち上がりつて奈津美の前まで寄つてくる。旬はいつものように笑つてそう言つた。本当に、何事もなかつたかのようだつた。

「ただいま……」

奈津美は、いつも通りの旬につられて、そう返事をしていた。

「旬……本当に、ずっと待つてたの？」

「うん」

「ひんなに寒いのに……風邪ひいても知らないわよ」

言葉はいつも通り、こんな時に限つても可愛げがない。しかし、声は、いつもより力がなかつた。

「大丈夫だつて。俺、バカだから今まで一回も風邪ひいたことねえもん」

そう言つて、匂は笑つた。

平氣そうなことを言つてはいるけど、匂の鼻の頭は寒さで真つ赤だつた。本当は寒くてしようがなかつたに違ひない。

「ふえつぶしょん！」

匂は横を向いて再び派手なくしゃみをする。

「やつぱちょっと寒いな」

匂は恥ずかしそうに笑つて、音をたてて寒を吸つた。

匂は鼻水を垂らしていた。それに気付いていない匂が、何だか情けなくて間抜けな顔で、思わず奈津美の顔が緩んだ。

「匂、鼻水出でる」

「え……マジで！？」

匂は涙を啜りながら、手の甲で鼻の下を擦つた。

奈津美は、鞄の中からポケットティッシュを取り出して、その一枚を匂の鼻に持つていく。

「ほり、ちゃんとかんで」

まるで、母親が小さな子供にするようにして、奈津美は言つた。

匂は、派手な音をたてて鼻をかんだ。ジュルジュルと音をたてて、鼻水が出ているのティッシュ越しの感触で分かる。

「んなことは、旬だからできる。旬だから、別に嫌じゃない。

「うわっ。大量」

旬自身も驚いたようにそう言った。

それがおかしくて、奈津美は笑った。

「へへっ」

旬も、奈津美を見て、いつものように笑った。
その時にふと触れた鼻先が、とても冷たい。

「寒かつたよね……早く中、入ろ」

できる限りの優しい声を心掛けて奈津美は言った。

「うん」

旬は、嬉しそうに頷いた。

奈津美は、部屋に入ると、すぐにエアコンをいつもより温度を高くして付け、こたつの電源も入れた。

「旬、こたつ入つてて」

奈津美は「一トを脱ぎながらそう言った。

「うん」

旬は一直線にこたつへ向かって体を入れる。

奈津美はキッチンへ行き、ケトルに水を入れて火にかけた。

「匂、口コアでいい？」

匂が好きなものを入れようと思い、奈津美は匂に声をかけた。

「うん。ありがと、ナツ」

匂は上半身で奈津美を振り返つて、笑顔で言つた。

奈津美は、湯が沸く間に、カップを二つと口コアパウダーを用意する。

口コアは、匂が好きだから、必ず置いておくようしている。

コンロの前に立ち、奈津美は匂の方に背中を向けたまま、黙つていた。

今日は、いつもより静かだ。コアコンが動いている音がはつきりと聞こえるほど……

いつもなら、匂がやたらと話しつけてくる。もしくは、独り言ともつかないような調子で何かを言つている。何せよ、匂が何かしら話すことによって、いつもはその場が持つていてる。

でも、今日は、その匂が何も言わないせいか、静かになつていてる。やつぱり匂も気まずいのだ。

確かにそれは当たり前だ。いくら匂でも、三日前から今日までの膠着状態があつて、いきなりいつも通り、なんてできるわけがない。やつと、やつとまでは、必死に装つていたに違いない。

「のまま、匂が口を開くのを待つてゐるわけにはいかない。こつちから、ちゃんと話を切り出さなくてはいけない。

三口前の「」と、そして、それからずっと連絡を取らなかつたこと……それだけでも、謝らなければならぬ。

そうは思つても、なかなか口は動かなかつた。

『「」の前は「」めんなむ』

『ずっと連絡も無視して「」めんなむ』

『「」の前言つたのは、本心じゃないから、気にしないで』

『あの時はあたしがどうかしてたの』

心中では、言つたいことは次々出てきて繰り返す「」ができるのに、中々素直に口を開くことができない。

じつしょり……

もう思つた時だつた。

「ナツ……」めんな

旬のそんな声が聞こえた。

「え……？」

奈津美は驚いて、旬の方に振り返つた。

そこには、きちんと正座して奈津美の方を向いている旬の姿があつた。

旬は、真剣な顔で口を開いた。

「俺……本当に、今までナツの「」とひやんと考へてなかつたつていうか……いや、ナツの「」とは本当に大好きだし、すっげー大事に思つてるよ！……でも、知らないうちにナツに甘えてたのは、確かだ

と思ひ。ナツがどう思つかとかは、やつぱり考へられてなかつた……

「……」
ナツはすでに頭を下へ、匂は俯いた。

「これじゃあ、俺、ナツの彼氏って言えないよな……」

やつ齒くと、顔を上げて再び真剣に奈津美を見つめた。

「でも、これからは気を付けるから……だから……別れるとか、考
えないでほしいんだ！ 俺は、ナツが一番大切だから……ナツがいな
いとダメなんだ！」

「匂……違うの……」

奈津美は慌てて声にした。

「匂は全然悪くないの……あの時は……あたしが勝手にイライラし
てて……それで匂に当たるみたいになっちゃって……どうかしてた
の。連絡も……何だか気まずくてできなくて……だから、匂のこと
を悪く思つたわけじゃないの……」

奈津美が一気に話した様子を見て、匂はきょとんとしていた。

「……じゃあ、別れよつとか、思つてない？」

匂は、神妙に尋ねた。

「うん」

奈津美は、すぐに頷く。

「じゃあ、これで仲直り？」

「うん」

奈津美はまた頷く。すると、匂の顔が綻んだ。

「よかつた……」

その一言に、本当に安心しきったような、まさに胸を撫で下ろしたといつ、そんな気持ちが込もっていた。

「……しゅ

奈津美が匂を呼ぼうとしたらタイミングが悪く、ケトルがピーッと高い音をたてた。

奈津美は慌てて「ソロの方に向き直り、火を止めた。

本当にタイミングが悪い……

おかげで肝心なことが言えなかつた。

匂に『「じめんなさい』の一言を……

自分の性格がどれだけ意固地なのか、嫌といつぐらうに思い知らされる。

たつた一言なのに、何と言えないのだらう……

匂の方が分かっている。いつこの時はどうしないといけないのか

結局は、匂まかせだ。さつきのだつて、匂が先に口を開いてくれなかつたら、何も言えてなかつた。言えたところで、謝罪といつよりは言い訳で、本当に言わないといけないことは言えてない。

奈津美は小さくため息をついた。

「ココアを入れて、奈津美は匂のところへ持つて行く。

「あ、ありがとう、ナツ」

匂の前にカップを置くと、匂はこいつものよつに「ココア」と笑顔を奈津美に向ける。奈津美もつられるように、顔を緩めて、匂のそばに座る。

「ナツ。これ……」

匂は、ココアを一口飲んで一息つくと、着たままだつたダウンジャケットのポケットから、何かを取り出してこたつの上に置いた。

それは、手のひらと同じぐらいの大きさの黒色で光沢のある紙袋だった。ピンクのリボンで飾られて、プレゼント用のラッピングをされているものだと分かる。

「何？ これ……」

奈津美は、それを見て、首を傾げた。

「開けてみて」

匂は何だか照れくさそうに笑いながらそう言った。

意味の分からぬまま奈津美は言われた通り、その袋を手にとつて裏返し、口をとめてある金色のシールを丁寧にはがして開けた。

逆さまにして手の上に出てきたのは、小さくて細長い直方体の箱だった。それは、新品の口紅だった。

「旬……これって……」

奈津美が驚いて旬の顔を見た。

「うふ。この前、俺のせいで折っちゃったから……本当は来用に渡そうと思つてたんだけど、その……色々、ナツに嫌な思いもさせてるから、そのお詫びつていうか、わ。あつ、でも別にこれでキャラにして貰おうとか、そういうことじゃないから！……何ての？俺なりの誠意つていうか……」

旬もいっぱいぱいらしく、段々しじるもじるになつてくる。
それだけで、旬の気持ちが伝わってきた。

「同じバイトの人聞いたり、雑誌借りたりしてさ、人気あるらしいのにしたんだ。色とか、ナツに合いそうなの選んだんだけど……」
照れ隠しなのか、下を向いて頭を搔きながら旬は言葉を続けた。

「でも、口紅つて高いんだなー。俺、びっくりしたよ。女人つて大変なんだなつて改めて思つた」

普通、マナーとして自分があげたプレゼントの値段のことなんて、言つたりしない。でも、旬だから許せる。

実際、旬がくれたのは、人気ブランドのもので、旬にとつては、大きな買い物だったに違いない。それは、奈津美のためにしてくれたことだ。

「…………ありがとう」

大事に、包み込むよつとして、奈津美は口紅を握った。

「へへつ。どういたしまして」

旬は嬉しそうに、笑った。いつも通りのしまりのないその表情が、奈津美の心をくすぐった。

それから旬は緩みっぱなしの表情で、ココアを一口飲むと、再び口を開いた。

「俺さあ……あの時、ぶっちゃけ嬉しかったんだ。ナツが俺のこと心配してくれたこととか……ナツが言ったこと」

『…………』

『…………』

「え……？」

奈津美は困惑する。

あの状況で、あの自分勝手な発言が、どうして嬉しいこと思えるのか……

「何か……初めてだつたからさ。ナツがはつきり俺のこと心配してたとか、好きだつて言つてくれたの」

視線をココアに向けて動かさずに言葉を紡いでいく旬を、奈津美はただただ見つめていた。

「俺……ちょっと不安だつたから……いつも、俺だけがナツのこと好きだつて言つて、俺だけがナツのこと好きなんだと思ってた。ナツが俺のことどう思つてるか、自信なかつたんだ。付き合い始めたのも、何だかんだ言つて、俺が無理矢理つてどこもあつたし……ナツは優しいから、別れようとか言えなかつたりしたのかなつて思つたり？ だつたから、嬉しかつたんだ」

旬は、苦笑して、またココアを一口飲んだ。

「あー、でも別にナツに言われたのに懲りてないわけじゃないから！　後でメチャクチャ後悔したし！」
すぐに慌てた様子で、旬はそつフォローを入れる。

旬は自分のためにそこまで必死になつてているのに、奈津美は、伝えなければならないことを、何一つ言えてない。

こんな自分のために、旬はこんなに必死になつてくれているのに……

「え……ナツ？」

旬の驚いた声が聞こえた。

奈津美は涙を流していた。誰かの前で、泣いたのは、小さい頃以来だ。
それも、旬の前で泣いたのなんて初めてだ。

奈津美は俯いて、声を出さずに泣き始めた。

「ナツ？　『めん！　俺、また変なこと言つた？』
焦りながら旬は奈津美の顔を覗き込もうとした。

次の瞬間、奈津美は近寄ってきた旬に抱きついた。
ぶつかつてくるように勢いよく、体重を預けるようにして抱きついてこられた旬は、よろめいて後ろに手をついたが、それでもしつかり奈津美を受けとめた。

「ナツ……？」

奈津美には見えなかつたけれど、匂はきつと呆然として、戸惑つているだろつ。

こんなことは、初めてだ。奈津美が泣いて、奈津美からいつやつて匂を抱き締めたことなんて、ほとんどない。

「ナツ……どうした？」

匂はそつと奈津美の背中に手を回した。

匂も、どうしたらいいのか分からないとつよつよ、そんな戸惑いが、手から伝わつてくる。

「匂……じめん。『じめんね……』

酷い涙声で、奈津美はやつと匂に謝ることができた。

匂の首に回した腕に、ほんの少し力を入れた。すると、匂の匂いがした。

香水などではなく、所謂人の匂い…体臭だ。今まであまり気が付かなかつたし、特に意識もしていなかつたけど、今日はとても強く感じられて、奈津美の心を落ち着かせてくれた。

そうすると、涙が止まらなくなつた。奈津美は、ついに嗚咽を漏らしながら、泣きじゃくつた。

「ふええ……しゃつ、匂……じめ……『じめんなや、い……『じめんなや……』

奈津美は、まるで小さこ子のよつて、大泣きしながら何度も匂の耳元で謝り続けた。

匂に対する、色々な思いを込めて……

「ナツ? 何でナツが謝つてんの? つうか、何でそんなに泣いてんの?」

旬は、こんなに大泣きする奈津美に、パニック状態だつただろう。それでも旬は、優しく奈津美の背中を撫でてくれていた。

「あつ、あたしも……不安……だつた、の……」

さつきより酷い声になつて、途切れ途切れになりながらも、奈津美は旬に自分の気持ちを話そうとした。

「あ、あたし……何でつ……旬が……あたし、と付き合つてつ……るのか、分かんなく、て……あたしはつ……旬、より……四つも上つ、だし……旬は……む、胸のおつきい人……好き、だから……それだけしか、見てない、のかもつて……思つ……たり、それに……ほ、本当に、旬は、あたしが、旬の身の回りのこと……全部してくれるからつて、付き合つてるんじや……ないかつて、本当に、思つたの……旬は、あたしじゃなくとも……いいんじや、ないかつて……あたしの代わりは、他にもいるんじやないかつて……そう思つたら、すぐく……嫌だつた」

何でそういう思つていたのだつたと、今は思つ。

旬は、いつでもジコでも、奈津美に対しても気持ちをもらは出してくれていた。ちゃんと好きだとついてくれていた。

それなのに、あの居酒屋で旬の知り合いが叩いていた軽口の方を鵜呑みにして、消極的な奈津美自身の考えをそつだと思い込んで……

そもそも単純に、素直に、旬の言葉だけ信じていればよかつただけだ。

旬はこれを聞いて、どう思つたのだろう。流石に、少しさは、奈津美に対して怒りを感じただろうか。ずっと、旬のことを、信じてなかつたと言つたようなものなのだから……

でも旬は、奈津美の滅裂な言葉を黙つて聞いていた。話している間は、ずっと奈津美の背中を優しく撫でてくれていた。

「ナツ……」

奈津美の背中を撫でていた旬の手の、もう片方が、奈津美の頭に触れた。

今度は奈津美の髪を撫でながら、旬が口を開いた。

「前にも言つたかもだけど、俺は……ナツだから、好きなんだよ。もし他に、ナツみたいにおっぱいでかい人がいても、家事全般ができるような人がいても、それがナツじゃないなら、絶対好きになんかならないよ」

耳元で、旬の優しい声が聞こえる。

それをもつとよく聞きたくて、奈津美は旬に頬を寄せた。

「ナツ……大好きだよ。俺はナツの全部が好き。ぎゅっとすると柔らかくていい匂いがして、しつかり者で優しくて、たまに怒つたり、照れたり、笑つたり……今初めて見たけど、泣いてることも。ナツの全部は、俺の中の一部なんだ。……だから、俺はナツがいないとダメなんだ」

旬は、ありのままの奈津美を受け入れて、好きだと黙つてくれている。

今思えば、旬の前では、素の自分をさらけ出すことができていた。

「の！」と、元と返付いた。

「匂……あたしも」

奈津美は匂を抱き締める力を更に込めた。

「あたしも……匂の！」と、大好きだよ……大好きだからね……！」

口にしてみた、とても新鮮で、変に照れくさくて、いつもやつてはつきりと伝えようとして匂に好きだと言つたのは初めてだと、改めて思い知つた。

『 いや、あたしづつかりが匂の！」と好きなだけみたい……』

…』

そんなことをなかつたのに……

「なんなんだつたら、匂の方が不安に思つて並たり前なのに。」

「匂は……だらしなく、いつも部屋行くと汚いし、ニッヂなことばつかしてくるし……本当は、あたしの理想とは全く違つたけど……」

さつもの返しのようにな、奈津美は、匂に対するこだわりを告げる。

それで出でくるのはやつぱつ、あまつこことではない。

「でも……それでも匂だから……匂だから好きだよー。匂じやなかつたら、一緒に居たいて……離れたくないって、思わないからつ……」

元はと言えば、勢いで付き合つて始めた匂……

何とかなるだろ？ 付き合つてこなば、わつと好きになつてこく

だろう。初めはそんな気持ちだった。

でも、いつの間にか、こんなにも旬のことが好きで、旬のことが愛しくて、奈津美にとつてなくてはならない、側に居ることが当たり前の存在になっていた。

「よかつた……」

耳元で旬の安心しきつた声を聞くと同時に、奈津美は旬に強く抱き締められた。

「よかつた……ナツが、俺のこと嫌いじゃなくて……」

それを聞くと、おさまりかけていた涙が再びこみ上げてきた。

「……………旬…………」

「えつ……………？ 何でそこで泣くの……………？」

またもや慌てた様子の旬だつたが、奈津美自身、何で涙が出るのかいまいち分からなかつた。

でも、安心したような、嬉しいような…………少なくとも、悲しみから涙ではなかつた。

「ナツ～、泣きやめ～？」

旬は、そつと抱き締めていた手を離し、両手で奈津美の頬を挟んで撫でる。

奈津美は顔を上げる」ことが出来ずに、俯いたまま涙を流した。

「ナツ。俺、ナツは笑ってる時の方が好きだよ？ だから、笑つて

？」

そう言いながら、匂は奈津美の顔を上向かにした。
匂と田が会つ。

「…………やっぱ泣いてるといもぬひゅへひゅ可愛い」
笑顔になつて匂は言つた。

言つてゐることが変わりすぎて、奈津美はおかしくなつて吹き出した。

「もひつ……何言つてんの」

久々の、奈津美の口癖だつた。

「あ、やつぱナツはそつじやないとな」

匂は奈津美の表情を見て、満足そうに笑つた。

きつと、泣き笑いの変な顔になつていただろひナビ、そんなことは気にならなかつた。

指で田元を擦ると、落ちたマスカラとアイラインで黒くなつた。

「メイク、落とさないと……」

奈津美は小ちくちく泣つて匂の腕の中からそつと抜け出した。

匂に背を向けて、ティッシュで涙を拭いて、いつも使つてゐるクレンジング用のウェットティッシュで落としていく。

手鏡で見ると、思つた以上に酷い顔をしている。

田元のメイクが落ちてパンダのよつで、匂は充血して鬼のよつだ。

これでさつと泣いていたのだから、もつと酷い顔だつはずだ。

その顔を可愛いと言つた匂は、やつぱり物好きだと思つながら、

奈津美はマイクを落とした。

ぐるぐる るるる~~~~

旬の方からキテレツな音が聞こえ、奈津美は振り返った。

見ると旬は腹を押さえている。

「ハハツ……そう言えれば俺、まだ晩飯食べてなかつた。気が抜けたらつい鳴っちゃつた」

恥ずかしそうに笑いながら、旬は言い訳した。

思わず奈津美も笑みを浮かべたが、旬が空腹なのは、奈津美が何時間も待たせてしまつたせいだと気付いた。

「旬、何食べたい？ 出来るものならすぐ作るから」
お詫びとしてそのくらいのことばはつゝと、奈津美は体ごと旬の方に向いた。

「ん~……じゃあ……」

旬はじつと奈津美を見ると、ニヤツと笑つた。

「ナツ食べたいなあ……」

ほんの少し甘えを含んで旬が言つた。

その次の瞬間には、奈津美の体が動いていた。

「……なーんて。……え？」

笑つて冗談にしようとした旬の唇に奈津美の指が触れ、言葉を遮

る。

「ナ……ナツ?」

予想外の出来事に、旬は田を白黒させる。

奈津美も、まさか自分が「こんな」とあるなんて、思いもしていなかつた。

奈津美は旬の顔に、お互いの呼吸がかかるほどに近付くと、

「いいよ。食べても……」

そう言つて、旬の唇に自分の唇を合わせた。

奈津美からこんなに大胆なことをしたのは、初めてだ。きっと、自分も気付かないような本能で旬を求めていたのだ。

舌を忍ばせてみると、ほんのりとローラの味がした。それを少し味わつて唇を離すと、旬は呆然としていた。

目が泳いでいて言葉を発するのも忘れてしまつたかのように、固まつている。

まさか、引かれた?

あまりに大胆な行動をしそぎて、流石の旬も敬遠してしまつたのではないかと、奈津美は不安になる。

「な、なんてねつ」

恥ずかしくて、そう笑つて誤魔化そつとした。ちゃんと笑えてい

「『めん、なんかあるものでぐ作るね
その場から逃げよつとやつと書つて奈津美は立ち上がつた。

台所に行こいつとした奈津美の手を匂が掴んだ。

「え……匂？」

匂は、眞面目な顔で奈津美を見上げていた。

「ナツを食べる」

そう言われ奈津美は手を引つばられ、匂の腕の中に収まつた。

「いただきまーす」

耳元でそんな声が聞こえ、あとは、お互に求め、求められ……

二人の愛が、より深まつたことを知つた一夜になつた。

数日後

奈津美は、遅くはなったが、旬のためのバレンタインのチョコレートケーキを作り直して、旬の家にやつてきた。

「……何これ

旬の家に踏み込んだ時の奈津美の第一声はそれだった。

台詞としては、いつもと同じだったのだが、その声は、いつもより力が抜けていた。

いつもは睡然とした感じなのだが、今日はそれを通り越して愕然としていた。

「あ、ナツ~」

旬が、玄関で立ち戻りしている奈津美を出迎えた。

「あ、それケーキ?」

奈津美の持っている紙袋を見て、反応する。

「うん」

奈津美はとりあえず頷いて旬に紙袋を渡す。

「うわ~。開けていい?」

旬は上機嫌で紙袋の中のケーキの箱を覗いて言った。

「待つて。旬。」Jの部屋の状態は何？」

奈津美は、少し厳しい声で旬に聞いた。

「何でいつもようじこんなにひどいの？」

久々に来た旬の部屋の中は、いつもと違った。いつもにも増して、散らかり、部屋がゴミや物で埋め尽くされていた。

久々、といつても、前に来て掃除した時から十日も経たないはずだ。今までにも一週間ほど来てない時はよくあつたのだが、その時以上……といつよつ、奈津美が見てきた中で一番酷い。

「えー。これでも掃除しようとして頑張つてたんだって」

「え……」

旬の言葉を聞き、奈津美は目を丸くする。

「俺だつて、少しはナツに見直してほしーからや……？」少し恥ずかしそうに、旬は言った。

「旬……」

いつもと少し違う旬を、奈津美は驚いた表情で見る。しかしそぐに真顔に戻つて、

「何で掃除しようとしてこんなに酷くなるのよ。……もひつ」奈津美はパンプスを脱いで部屋に上がつた。

「え……ナツ、ケーキは？」

「冷蔵庫に入れといて」

「え……」

「こんな中で食べれるわけないでしょー。掃除が先！」

奈津美に厳しく言われ、匂は残念そうに冷蔵庫へ向かった。

あれ以来、奈津美は今までと大して変わらず匂に接していた。

匂がありのままの自分を受け入れて、それを好きだと言ってくれるのなら、特に意識せず、自然体で振る舞おうと決めたのだ。

それにして、部屋の中の有り様は本当に酷い。

「どうしてここまでなってこるのかと、よくよく見てみると、いつもは散らかっている部屋には存在しない、大判の「ゴミ袋」が点々とそこらにあら。

それらは全部、中途半端に「ゴミを入れて放置してある。

「匂、何でこんなに袋を無駄使いしてるのよ。まだ入るのに勿体無いでしょ」

台所から戻ってきた匂に、奈津美は注意する。

「別に無駄使いしてるわけじゃないよ。分別してんの」

意外にも、匂は平然と言い返してきた。

「ナツ、こつやまはちやんと分別してて言ひやん。だから分けてたの」

あの匂がそこまで考えてやつていたなんて驚いた。

「でも分別してたら途中でややこしくなつてそんな状態」

さらりと挫折したことでも言つてしまつた。匂らしく匂らしくて、呆れる。

「もう……そんな言ひせじややこしくはないでしょ。燃えるのと燃えないのと、空き缶、ペットボトルぐらいなんだから」
そう言いながら、奈津美はそりそり落ちてこぬゴミ袋を拾い上げ、中身を見てみる。

「もー……早速空き缶とペットボトルが同じところに入つてゐ」
奈津美はペットボトルを取り出した。

「えへ。マジで？」

そんな風に言いながら、二人で掃除を始めた。

ゴミの分別とか、匂にしてはしっかりと考えていると思つたら、他のゴミ袋も色んなゴミが混ざつていて、大してできていないこと

がわかつた。

…それでも、今までの匂と随分違うと気付いている。

「いやつて、旬も一緒に掃除をするのは初めてだし、部屋の中に
ある「ミミ箱」が、いつもと違つて満杯になつてゐるのね、

『「ミミ箱に入れてつていつも言つてゐるでしょー。』

何度もそう言つたのを、意識してだらう。

旬は旬なりに、奈津美のためを考えている。

今も燃えるゴミと燃えなごミの区別がつかずに悩んでゐるが、
間違えていても、大目に見よ。

『俺だつて、少しさはナツに見直してほしくかられ……？』

旬がそつと言つたことが、今は何より嬉しかつたから……

「あ、ナツ」
いつの間にか、旬が奈津美の正面に回り込み、顔を覗き込んでいた。

「今日、俺があげた口紅つけてるでしょ
旬は一イツと笑いながら、嬉しそうと言つた。

「うん」

奈津美は半ば驚きながら頷いた。

田聰い。

確かに今日、旬に会つからと思つて初めてその口紅を塗つてみた。でも、旬が選んだといつ色は、奈津美がよく使う色とそんなに変わらない、淡いローズピンクだ。塗つてもいつもとそんなに変わらないから、気づかないだらつと思つていた。

それでも分かるのは、やっぱり旬だからだ。

「その口紅ついて、落ちにくくていって評判なんだって。知つてた？」

旬は得意気な顔をしてそつと言つた。

「うん。知つてる」

奈津美は頷いて答えた。

旬がくれた口紅は、CMでよく見るもので、旬の言つとおり、食事をしたりしても落ちないといつことをメインに宣伝している。

「もしかして、それで選んだの？」

奈津美には逆に、旬がそれを知つていたことの方が意外だつた。

「うん」

旬は、更に一ヶコリと笑つて頷き、そつと奈津美の顔に自分の顔を近づける。

「どうして？」

奈津美が首を傾げ、そつ尋ねると、旬の顔がそつと近寄つてきた。

「これでナツとこっぱーチューでもいい」

悪戯っぽい匂の言葉に、奈津美は田を丸くした。
そしてすぐ、

「わいわい……」

と、こつもの口癖を言しながらもはにかんだ。

二人は田を合わせて笑い合い、そのまま唇を重ねた。

柏原奈津美の彼氏は、年下・高卒・フリーター。家事は一切できないし、部屋は散らかすのが得意な方だ。

奈津美がいないと、まともな生活はできないんじゃないかな。
そんなダメ男の匂。

それでも、奈津美には匂が必要な存在だ。

何だかんだで、こんなダメ男に依存していたのは奈津美の方かも
しない。

11 後日談（後書き）

最後まで読んで頂き、本当にありがとうございました。いかがでしたでしょうか？
感想など貰えたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6480b/>

ダメ男依存症候群

2011年10月3日12時53分発行